東海道名所圖會

二

ル 3
3496
2

早稲田大学図書館
昭和35.1.28
書庫

門 ル3
號 3496
巻 2

早稲田大学図書館

東海道名所圖會卷之二

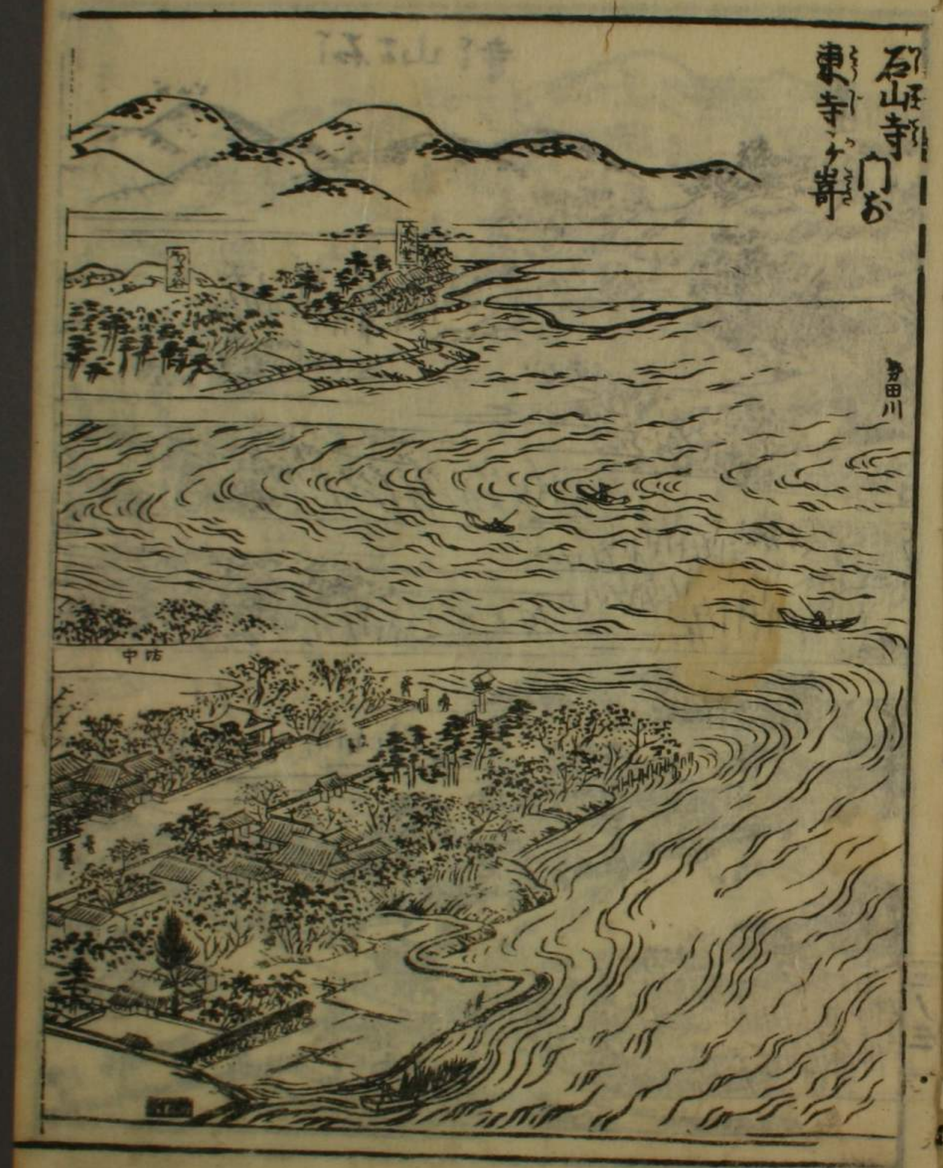
目錄

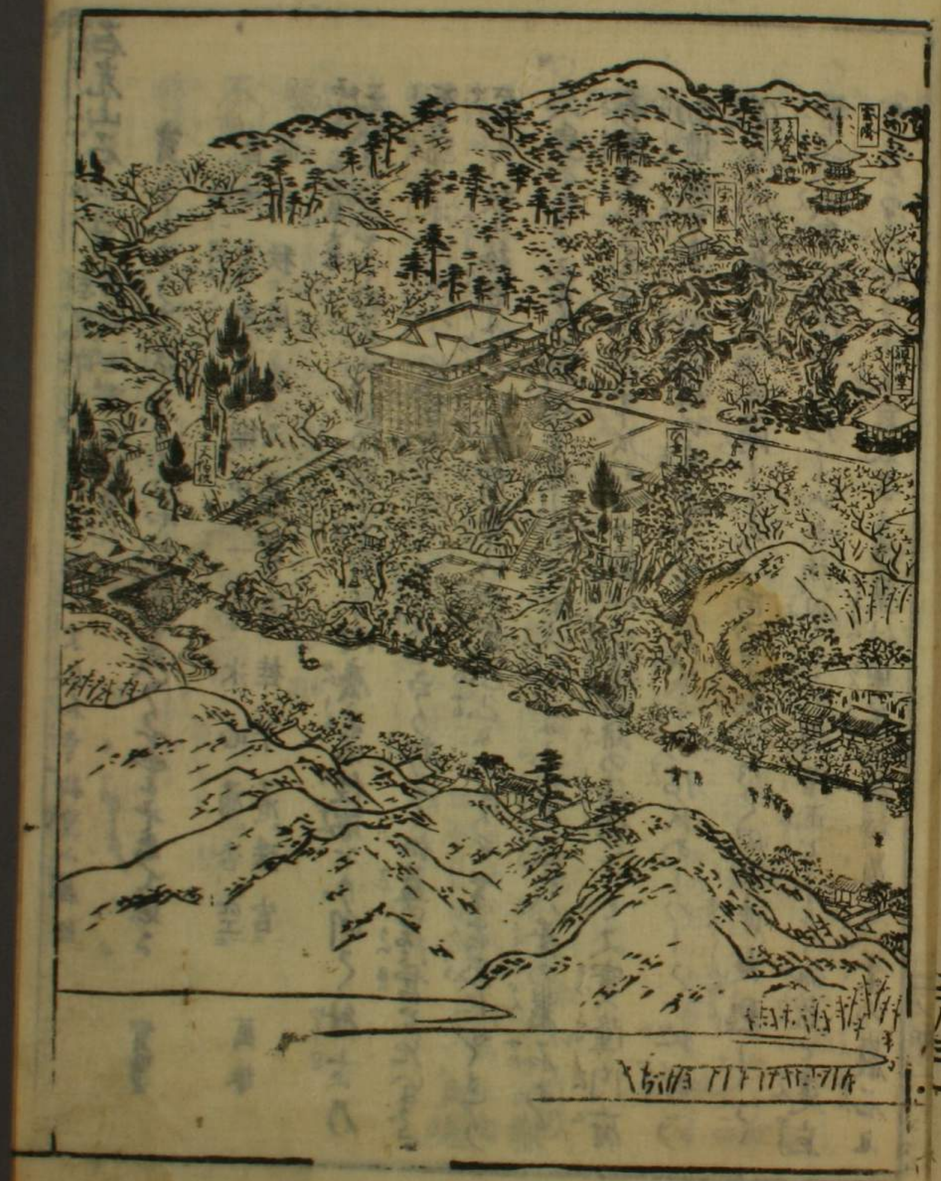
石山寺
食堂
本堂
佛舎利
八葉巖
大師刻彫名所
鶴士
大般若經
三十八社
經藏
亀谷禪尼墓
影向石
蓮池
古跡
廿三所觀音
龍六
東大門
古寺
空明菴
新宮明神
二金剛
恵寺
尼掛石
閼伽井
影向石
不動
阿弥陀
紫式部
多宝塔
御影堂
不動尊
小屋谷
曽我兄弟
陸橋
石山寺
義平の墓
蛍谷
奥の跡
行履岡
舍
荒浦
毘沙門堂
龍蟠
稚児
岩間寺
田上不動
龍神祠
野路玉川
石津寺
陀羅尼谷
谷上川
琵琶湖
野路篠原
山田石亭
○草津
矢橋
建部神社
勢田橋
御霊祠
幻住菴
秀郷祠
月輪池
鞭嵜八幡
立木祠

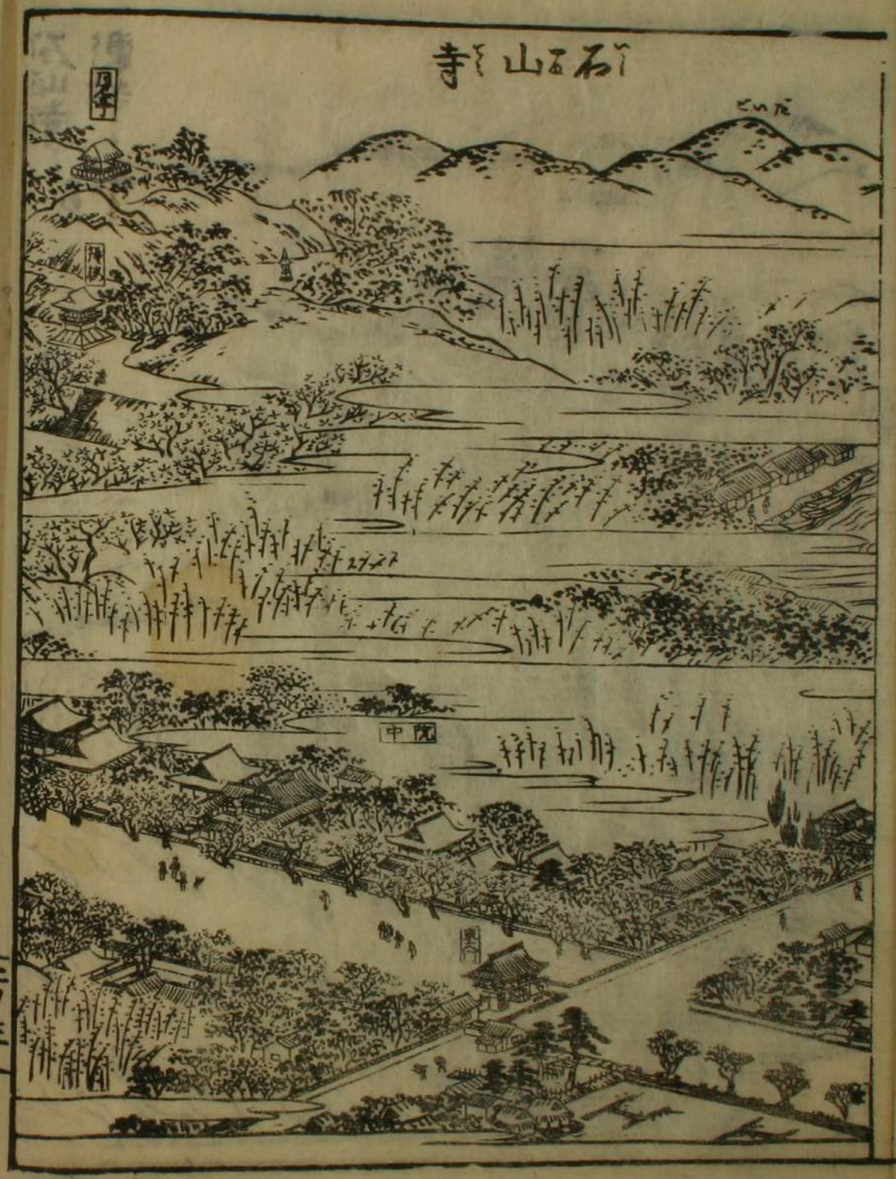
常善寺
灰冢山
三上山
石部鹿鹽上神社
西寺
菱見
樸田川
○水口
大圓寺
末社十八巻
杖傳
山上庚申
義朝着浣水
○土山
活人石銘
鈎古城
御上神社
金勝寺
東寺
日雲霊跡
岩根若水寺
水口神社
飯道寺
本社
大黒天
護法石
足跡石
龍化
石南峯谷
奉慶背競石
山口重成碑
田村明神
草津川
小野寺
新若宮寺
調貢
魁儀
妙感寺
万里小路藤房卿終焉地
本堂
阿弥陀仏
大師堂
石像
夷澤郊三滿宮
蓮華寺
恩川
阿弥陀寺
平松村美松
見川
梅木
是鄭
松中散
○石部
白山祠
山王祠
向石
伏藤
慈安寺
日村川
義經腰掛石
松尾川
鮮坂

迫勢國勝
攝社
横宮名
峯捨山
春宮道
○亀山
瑠璃光院
山毛赤人古蹟
迫多 春宮道
諏訪祠
曲阪観音
町屋川
天武天皇社
願證寺
鈴鹿山
八十瀬川
○關
出羽峯
森下
範頼祠
國分寺跡
日永
三重川
志氏神社
○栗名
一本松
十念寺
鈴鹿関
琴之橋
惠模櫻
古馬屋
○庄野
○石薬師
杖衛坂
安國寺跡
建福寺
川原跡
名産白魚
長圓寺
光徳寺
鈴鹿神社
本社
鈴鹿社
○坂下
地蔵堂
布氣神社
白鳥塚
稚武彦祠
采女村
○四日市
那古濱屋樓
名物燒蛤
矢田八幡
壽量寺
池洲磯八幡

来名神社 末社 母山祠
輪崇寺
御寶殿
大圓寺
不動院
間遠濱口 朝祥岩 鬱の倉
津嶋濱
甚目寺
伊波多祠 藪春物
大福田寺 本堂 觀音堂 寛永法皇宸筆 什寶
佐乃富神社
法盛寺 本堂 金獅
楊柳寺
多度神社 本社 多度梅 立石巖 八壺溪 岩名山 獨鈷地
津嶋天王 本社 居象祠
萱津里
反魂塚
稲龍尾
本統寺 聖天祠
中臣神社 統藏 獅樓
佛眼院
最勝寺
赤須賀地藏 末社 五石 多度川 鷲尾山
伊勢海
佐屋 狗宮 法治寺
一王子 淵五帝廟 八王子 蚰蛛神
伊波多浦
伊波多社
豐太閤御出誕古蹟






石山寺
中院

石光山石山寺

志賀郡石山ふあり真言宗仏和寺御堂ふ屬ス
西國巡禮十三番れ所

貴〻しらるまで流もとめる石山の月まひりてやとをぬ出て思る　實堂

對月

香樓宴坐月明中　一片氷心滿杏空
深夜秋風吹又起　雲邊桂子落珠宮　萬菴

石山寺縁起集大意

天智天皇をぐわ多大津の宮ふ在せ〻時慶雲の住瑞をひかく往古の聖跡を示〻ものとゆくも正〻く荒稼をきう抑〻く伽藍の御宮ことはいまを至〻に故ふ縁起ハ云　天智帝の御宇ふ山ふあらて紫雲たにやまり天皇あや〻みまひ勅使を遣〻そ見せ〻れ〻ふ己の半腰ふ八葉の巖石あり赤雲をひきそ〻ぐり多常ふ形せり就ふ大聖垂跡の儀地をそ又實隆内府勸進疏云樂々波大津の宮ふあ〻ふ光宗玄の瑞ふあ〻り〻く地形乃蓮座ふ志光〻と云爾〻〻り一百の星霜を經く時機漸純熟〻〻聖武天皇宸襟の志ふ〻〻を所畢く良辨僧正と〻〻く伽藍を建立せ〻めまく〻むり〻上宮太子より歴代稟兼の御持尊と八葉の巖石ハ

安置〻百代の皇祚を守護〻萬世の勅願を禱奉〻め給人と〻

○本堂

天平勝寶元己丑年良弁僧正肇く基趾をひ〻き伽藍ふ造立〻〻
むるに〻も第層二年二月二百田祿の内ふ供奉給中興の志ふ厚〻〻〻〻
建久の頃ふ藤倉武衛頼朝ゑ再興〻〻ゆひ給ふ羅漢中ふ花山天皇
荒蕪ふ〻〻〻〻ふ豊臣秀頼ゑの母堂淀殿安民法世のなふ伽藍ふ修〻
花園と後〻〻く修補の功ある〻今の本堂ハ

額　當寺諸伽藍者江州北郡淺井備前守息女
亞相秀頼卿御母堂為二世安樂御再興也

○本尊二臂如意輪觀音

御脇内ふ竜る本尊長六寸の縁れ聖德太子の
御持尊〻〻〻〻

弘法大師剃髪名跡　中供僧祐師の親賢伝正と倶ふ大師の廟窟に入る
剃髪と
當寺宝一の宝寶なるよりいく　法陽成院表相と荘嚴し　大師の入内
小綴に古金襴なりとされと石山寺にたる世に名高し
石山記云

○源氏間　本宣の儀ふあるむし　寛弘の比紫式部は寺に参籠し
源氏物語を作らし　所に故に源氏の間といふ

式部に右近の丞藤原為時朝臣の女上東門院の女房なり
一条院の帝伯母選子内親王よりめしらしやうん也若やあるふし　女院に申
させ給ふ式部に仰せ作らせ給れは式部行て申さんそ當山に
七ケ日あり籠りて湖のうしはけるくと見つとされくんとをみさせ給へ
風情眼に遮り山に隠るる成あへ次大般若の料紙の内陣に成
本尊に申請ふ思ひあへぬ風情成書はけ申へ仏式部る日本紀に
なりしなれた日本紀局と呼ひ奉る

順徳院御記曰
源氏に世一胡説の非人間之所為不可説之事也世二哥秀逸是
又その人及之我朝之最上也又為の序に紫國の至寶に源氏物語なる

石山寺什寶
紫式部古硯
世謂石山形

竪　寸三分
横　八寸四分
厚　一寸三分

風藻空餘湖上秋
泓澄吞月水悠々
濡毫紫女今何在
一片研池萬古留

嶋山畑維龍

清輔袋草紙云
紫式部云名有二説一此物語紫巻作甚無之
故得此名者一条院之御母之子也兩説上東
門院令奉トテ音ユカリノ者也アハレト思
食ト令申給之故有此名武蔵野ノ義也
河海抄云
八月十日夜の月湖水のうへにくもりなく心の澄てるとゝふけあはれをもよほす
仰せの大般若經の次ノ明石の女御と書初しとそれより次第に書
らるゝ権中納言行成口清書ゆゑ秘院(まいらせらるゝ)と云台六十
巻なり一心二観の妙理を悟るゝいひ伝へ
長明無名抄云
物もゝ源氏作るゝ中に多おり(たり)〇世のかゝれるためつゝ五
巻ばかり深く仏にまゐらせ侍りしとそおぼゆ(る)凡まの右ゝ
たゞぬ中なりと云云　惟中歌無名抄云　源氏ハ和國の奇書也細川玄旨
法中の庖従ハ文本孝庸と云ひしゝ武士因州の牧ハ仕給ふ事年の時より
隨ひく委曲ハ傳授しく義絶うぬゝこのゝ口授もあり或時ハ孝庸
玄旨法中ハ世間の便ある者ハ申ハ一と仕ぺきと思さ給ふれど

源氏ものがたりと答申ひしゝ又哥學の物語第一のものゝ中と同夕(ハ)同しく
源氏と答さ仕申ゝそ何のも申も源氏ゝ多くすみ給ふ事と兼ねぬ源氏と百遍
はくさ申ゝ人ゝの成物と重ゝ孝庸ハ申ゝ
源語秘決云一来ゝ源氏の大事と十五箇条あゝ
一らうつか　源氏の服有無の事
一夕顔　侍童着格貫の事
一めゝひ　人ゝうの隨身の事
一あゝひ　さゝりいさ行ゝのゝ
一ゆう　まくあきの事
一とゝろ　ちゝうゝめるゝのゝ
一ものゝ　高中子の事
一ちのゝ　はいさちゝの月のゝ
一ゆう　陽名れをけのゝ
一ゝの　篠をゝくゝひ出ゝ事
一めゝひ　緑のとゝうゝ
一さゝ　とのゝのれゝゝくゝの事
一うゝ　わゝ君の子ゝゝゝゆひ行ゝる事
一ゆゝ　ねゝのくゝふゝゝゝ
一おゝ　ひのゝをひのゝ
一ゝ　源氏の間ゝ今
一ゝ　源氏の服ゝ
一ゝ　賢ゝ迎衛ゝ
一ゝ　藤院信基公の事あり
紫式部畫像
讃曰
有門空門亦有亦空門非有非空門
ちゝゝふいゝゝゝゝゝゝあゝゝゝゝゝゝ

天台四句文と讃とかゝるを以て也造ふつたはるたゆへある事なり

この海抄に

式アハ檀那院の贈僧正の許可を蒙るなり天台一心三観の血脈を入れり

○てうり宗聖三昧院の幽閑をたゝひ〳〵えるもつとも〳〵ゆへあるなり

硯石　深氏の向の壺奥にあり式アハ所持の硯なり深氏と申けるとき山石原硯なり海二つあり鯉の形を彫く方右なり日月陰陽の象と硯〳〵鯉の方へ濃シ朴の方へ淡し　海の二面あるなり

大般若經　式アハ自筆大般若經　今当寺の什寶なり　深氏の向　式部紙数なり　慈恵の可入　深氏の筆　今なり　王子　右奉　仏壺　奉　紙　数　多　一　紙　数　多　一　右　奉　仏　

昇らぬとあり故郷忘れを大山寺公卿を出誕前
相遠あり今成寺巻相州の下に所
○八重櫻 門教堂の西にあり 古木なり 植久世々植継
拾ヒ
石山の堂はすべて石の柱の木を用ひたるなり
○影向石 ほ所にあり観音
○船繋石 比良明神船をはかせ給ふ
○影向石 弘向のいしとも
○倚子石 坐人の安座を石にて寺多し 寺鎮護に故ある事
○猪南院毘沙門堂 石燈の上にあり 中ゐる立像毘沙門天 脇士吉祥天女 禅衆
子毒子遠久の比 採邪顕魔 仏毘沙門の威力をかりて
敬て礼し 敬礼 南寺より南に当て南に賜ふ 寺号せり 仏親 絶
藤 名 敬の命 数りて京都の守護に上洛とる事 東鑑に見ゆ
○食堂 十燈の地にあり 堂傍文殊を安 此天台山破斜に遇て湖水に陸に東寺ケ崎に
長六尺 仏教大仏の他 大台山
燒 とある ○蓮池旧跡 元政の墓山集に出
○比良明神影向石 食堂の南にあり 初め南寺茶創の時 此壬比良神山石上に
安座して 傍正に観音の霊験を示し 山の教験に
八業の岩 ある事 ○手水石 倚文に世尊院の一代恵命院権傍正
格 格 盛の事
○不動明王 中むり 爰櫻 ○龍蔵権現 南山の鎮守之 然 権現の別社
仏 仏
○此三所観音堂 中に信尼あり 東寺 中地蔵 東寺 中地蔵 中地蔵 中地蔵
建立 建立

○阿伽井 中堂の北にあり 昔観音供 [illegible] 中堂の下の石
湧出く潮水 流 [illegible] 味 人中古 此教の時 此和歌里 南乃小河
今は真清水 [illegible] 三度 五度
○天狗杉 山の入口にあり 南寺の護法神
山杉 樓 [illegible]
○柳島 天狗杉の西南にあり 第爵二年二月二日 中堂 堂焼の時 観音
飛出 [illegible] 信の柳 柳れ上に [illegible] 仏令 [illegible] 焼 [illegible]
○谷川 街 伽井の [illegible]
朗詠集
○谷川のふるいはあやゆ [illegible] 泉 飛 雨洗 聲聞 夢 葉 落 風 吹 亀 相 秋 高丘相如
○奥門跡旧趾 [illegible] 今 [illegible] 孝標女 住房の
公 [illegible] 海 [illegible] 有 [illegible] 曾 [illegible] 成就院 [illegible]
月 [illegible] 頃 法 [illegible]
孫 [illegible]
日 [illegible]
○龍穴 井 奥の門 [illegible] 山谷の風 [illegible]
早 [illegible] 雨 [illegible] 早 [illegible]
○尻掛石 穴の側 [illegible] 龍王 [illegible] 龍池中

う出現しつく和尚公恭敬し給へり
朗詠集 蓬波路遠雲千里白霧山深鳥一聲　宜幹

○義平墓　鎌倉の源太義平は国石山寺の辺に居る所の経塚の前に埋む
弟等生捕らる六波羅へ引て誅せられしは永暦元年正月廿五日
生年廿二才〻平治物語に曰く義平東の軍に敗れ
山前に遁れ居る所の比叡山寺に籠り
僧房に向ひ逃れ捕はれ
山義平の墓とかけし前に三条を倉と今に至つて崇あり
もるく空地へ都名所圖会拾遺に曰く義平

○小屋谷　又かろい谷とも山辺の谷れ地名と義平
舟嶽石の山の絶頂にて昇天し

○庁履岡　東方二王門と都て今の諸仏蓮花
遺しそ昇天し

○東大門　東方二王門と都て今の諸仏蓮花
鎌倉将軍頼朝と龍谷禅尼の勧進
志願と記し仏門も安は運慶法橋
弟具陳一とい

二金剛像　東大門の安置の仏の
石山寺額　義原行能の筆の額の背面に仁治元年十月十三日
従三位義原勅旨行能書之と
○右の門門の堂塔の名蹟と当寺房の旧跡多し
のわ大　寶性院　明王院　吉祥院　南大院　法華院　密蔵院　持寶院
世尊院　圓乗院　門外の西より　松中坊　中西坊　西本坊　東大院　岩本坊
岩本坊　海本坊　東池坊　多聞坊　御月坊　等

山院中は持寶院といへり天文の比まで倉之坊
八月　秋名院公條文覚寺門跡准后　紹巴　宗吉　あり
五日の會莚あり〻千句の連歌あり
ちまたに石山の月　石山の月と
都名所

都みもんやはつくんいーやまのみのこれば秋の秋乃月　義宗長能
後拾遺　つくるの山を秋のあふとのうみいかくこころ〻ハ　俊頼
紀通知は女とおりひめけく石山
ちりうくめとく宋公行て行く
めくーの美さえく女のめ
かくあんをうーいひつろ〻て行り
くれそをみくはろ〻そがきろ
いのうくむとこの沙先うそがきろ　四条中納
ちく沙せーはろる女とこ
石山ありあひて行れ浦溪行々
恋ーさもつをとれやいまるかつ　恋かれ浦沿　藤原為家
後拾遺　都ふく浦門とうもおり月　藤原定家
本文の言石氏後拾遺とえ〻ひて
石山るみく人さにとなせろ
和おの浦小浦とも和為て半月は　惟宗忠素
石山秋月
いーしやはる月のさわけさは　関白政宗

石山蛍狩
大日山

春泉齋

石山秋月　秋ー風 蕭 颯 一ー天ー涯 霜 滿テ四 山ニ不ー帶ー霞
詩、相國寺林長老　古ー木 囲ー岩 寒ー月ノ影 吟ー殘ス葉ー々 霧中ノ花
歌、後鳥羽院百時熙公　いしーやまのうみてる月ぬいのうらもなかるもなかるぬらい

夫石山寺ハ某創より年某久遠なりしく延暦二年ニ双びく郡多
一千有餘某ニ建て僧正良辨勅を奉て造ル所也ハ大悲の本願ハ安ー持念
せる所ハ陸奥の金を以て山より初く美金ハ貢る白髮明神巖上ニ現て垂く
霊迹なる事ハ示し第三ハ湖月を賞じて源氏を著ー瑪瑙の古硯ハ
ちむ本堂ハ巖上ニ建く真めぐらハ崔嵬る巖石層々として積字
寶塔所ー〻ニ見えうハ流ニハ連峰嵐々として岩間笠取礒湖ハ
て峰嵯る中ニ童場あり某ハ湖水の流ニ桃花ー〻く今古ハく
月を洛して古来石山の秋月ハ八景の一勝なり漁舟つらなりて供物の瀬へ
下ー〻ハ月さはりの波ハ螢見るく河の面ハ船往ひ三弦の音今掃乃
声梅の香ニつまく美密をすちて大日山より死出の螢ハ子孫の叔ちぶ
名産なく石山の螢ハ他所よりも極く大キク光も強しあし風土のおん

西國巡礼ハ古ニハ朱ッく長藏の贊ハ散ー桑宮坂迄ハ共ニ步混ー〻く
夏ハ催涙雨ー〻より古人の秀歌多く代々の勅撰ニも多く出ぬ
三尺の童子ハ初の墨紙の表書ニ石山秋月と記せるハ貴ー〻く
徒とかく山名勝を賞ぜるの専なるべし謝莊が月の賦ニ清賀の悠々
なる所ハ升澄暉の藹々なる所ハ卯富縟なる事ハ揖ひ長河の映と鞭ー
〻そ山めぐりの事なるべし

和歌抄　石山ハ哭日々しのぶをやはらんぬるも志ぬひ人ぬしの声　若宗宣公

○是より已下石山寺門外の名所

○東寺ケ崎　大門の傍ニ在て石山寺の内ニ湖水の間ハ東寺ケ崎ハ珠ニ
関と禁ー〻く　ケ崎ハ縁青院宣武家の下知状等ハ たびくニ見ル今ハ

○螢谷　石山寺より岩田その半にあり初夏の比ハ此谷より螢多く出る
湖水ハ山所の石垣
○浮橋　或ハ憂橋又浮身橋ハ山橋ハ古より名所にあり螢谷より流れ出る陵川の橋
玉葉集　園融院の石山ニおこりて始る九月晦日
殿上人ぬしうたそ山ぬきりて始る

和歌も見るみちもなきものゝ様なれば　西行法師

緣起に寛和元年八月廿日　圓融院御かうの石山まゐり給ふ　道の中にて月ぞ出ぬる

○荒痛茶所　当国より石山の道の側にあり　石山寺の別所

本尊石像茶所日光月光十二神将の像あり　緣起に延寶四年石山寺の服の時龍女山堂を造り　其鬢髮を納めたる　今社殿　又荒痛と称する事は云むり　山石佛躰　里の老　茶刈　藤太山石　ゆく　砌に　嘆　こゝ　一宇成　建　しく　梵殿も　繼　寄附　人　寺成　再建　源州元政法師の老母の古跡　石山の寺の村　田畑　石山の　尼　茶　土人　記　仏像を感得し　源州　瑞光　安芸の事　或は空明庵　詩稿　茶山集

○城墟　城の古蹟　城の築　小祠　今民間に　天正の比　須賀英山城主　人居城せられし

○毘沙門堂　城の守護神　長六尺　井上　天保威壇の相好

○新宮明神　石山の鎮守　寺造　村　山の生土神　例祭三月　今は神典一墓　新宮尚社　遠近群詣　新宮の所

○財川　石山田圃の中小あり　財川　後世居宅の古跡　故名　石山寺の政所

右已上ハみな石山寺に属ス

岩間山正法寺

石山の奥岩間にあり　真言宗

西国巡礼十二番札所　長四寸三分金銅仏　弘泰澄和尚の持念仏

脇士左右　大日　如来　千手観音

本尊千手観音

それ当山は　元正天皇の御宇　養老年中　泰澄　和尚　霊地を　放光　建立

安置　一堂　一楼　平地　金銅千体　北面　本尊　成　南面

坐禪　苦行　二年　及　又伽藍の西南

桂樹　等　身千体の像　他　彼金銅の小像

を竜宮　醍醐　岩間石山の間　足を踏　路　西国順礼の歩

陀羅尼谷

石山の醍醐へ出る山中の細道　古傳に供僧法師の観賢

傍西の谷八町　陀羅尼を誦し　生　遷

御霊祠

例祭三月二日

多賀の西の方にあり　茶所への近道　居川村小入谷村の生土神

茶神大友皇子　相傳　山皇子　見茶天皇と合戦　又大皇子　遷

手ずから　山皆田　植　皇子　左右　大臣等　僅身免　以逃之

別所常主　山中　皆田　日本紀　大友皇子　日本紀云　男依等　即軍二千粟津　罪下是日羽田公矢國出

雲臣狛合共攻三尾城降之壬子男依等斬近江將犬養連五十君及谷直塀手於粟津市於是人友皇子走無所入乃還隱山前以自縊焉

國分山
芭蕉翁
幻住庵
古蹟
岩間

笠取山
瀬の
すゝり
石山
岩間の
奥
今

幻住菴舊蹟

芭蕉翁幽棲の蹟之碑田の畦より石山寺に至る中途なり

経塚

旧跡の傍なり八幡宮の殿の軒に掛置る紀しく四方八町の奥に國ゝとしるし

少々の清水

経塚より十歩許なり幻住庵記に

幻住菴記略云

石ゝの奥岩角のうしろふ山ゝ重なる谷ゝ細き流を渡りて杉木茂り人音まれなる所に神体八弥陀の堂ありと聞く唯一の僧ありて侘しく住る様と聞く

麓に洞ありて人の住居しるべ草の戸のうちよりたれかいとはんと思ひ侘て

南薫峠

幻住菴ゝ云中略山ゝ未申の方にそびえ人家ゝ遠ゝ

ふもとより半腹の松の根ゝ

北郎海を浸しく

一日枝の山北に良久

士峰の

武蔵の

古人と

千丈が岳

集の

黒津の里

名ばかり

菓の

菴を結へる王

山民

唯聴

屋根

山を

草の

今の

住ふし

蕉翁おくみこと多の業月を居く、長明の方丈記ゐ效く幻住庵の記ハ
書れ一箇九旬ゐハ一石ハ一家ハ僧ゐ法ゐ二十八品を書寫し里のわらべを
あハ先く礫を石ハ其價ゐハ糖菓をとりの墨ゐれゐ換く其功を逐ひゐ
今わらゐゐハ山純石土中より出ること其記文の末ゐ

先ゐのむ椎の木もあり　夏木立

山一句を遺ゝく閑素幽樓の風流ゐ著し生涯名利を棄て月雪ハ戯れ
ゆハ記中の社ハ近津尾八幡宮ゝく國分村の生土神ゝ　聖武天皇の御時營ひ
ゝ國分寺ハ慶ゝく本尊薬師佛ハ村中の道場ゐあり又別保の薬師もあり
ゆくくの宋ハ汲ゐを汁ゐもゐた復ゐハ椎の木ハ伯夷が廉ゐ換ゐ妹ゐ
賠ゐの城橋ハ劣ゐのゝ　さゝが嶽ハ初住ゐ方ゐ東の方谷上山の清ぎたこ
千丈が出嶽とゝハ押の方ゐゝく山ゐ高山小千丈南千丈の二峯あり
横腰ハ千丈が嶽より一里南ゐゝく劣田川ゐゝ西ゐ流れど家ゐもゐ
をゝと流ゐん笠取山ハ石山と磯湖の中ゐあり流れ守法山の春撰ゐ嶽

洛北の朗詠谷芳聖の居清水外山の方丈石ゐやゐみゐ同日の論の山居ゐゝて耕ゐ
釣月の隠逸ゐ

太神山不動寺　谷上山高峯ゐあり又田上とも書次人谷上不動と称ゐ
谷人ハ鳥巣を多ゐ供ゐ三年ぎの紀下ゐり
本尊不動明王　相傳大師の作ゐ長六尺高三の彩創ゐ　清和帝乃作
全躰ハ一峯ゐあり八大童子ゐ表ゝハ大龍王ゐ表ゝ八ツの谷ハ八大龍王ゐ表ゝ一の老僧
怨然ゝ　ゝ　ゝ　

谷上
金勝山
栗津
町田村

勢田橋
一名
玄柳橋

河水の
龍宮城へ
乗物
軽輕
うかび
来たり
竜

秀郷
到龍
宮城

勢田橋

志賀郡栗太郡の間に小橋長二十五間大橋長九十六間中絶あり高麗葱寶瑞餅に遊樂毒の執筆野と錦を拾茶坊云 年代大橋を勢田 一名 青柳山 嵯峨三代實錄曰 貞觀十一年十二月四日勢田橋焼るとぞ 新古 勢田橋或いは瀬田橋とも云 新古 貞永の板も苔生そうり成ぬ々うり賣世面めくんせさの色橋 西行

湖のうみや霞てくく春の日ぬ深るも遠し岩さの色橋 光宗

風雅 沖の洲崎波ぞきあるあ何中ぐらのせされも橋者もろ、ろ丸 家靈

さゞ波やうち出くまれば白妙の雪ぬけうるせさろ色橋 信實上人

新朝 をふ二上のとみくく旁立つうせさの色うり 長雅

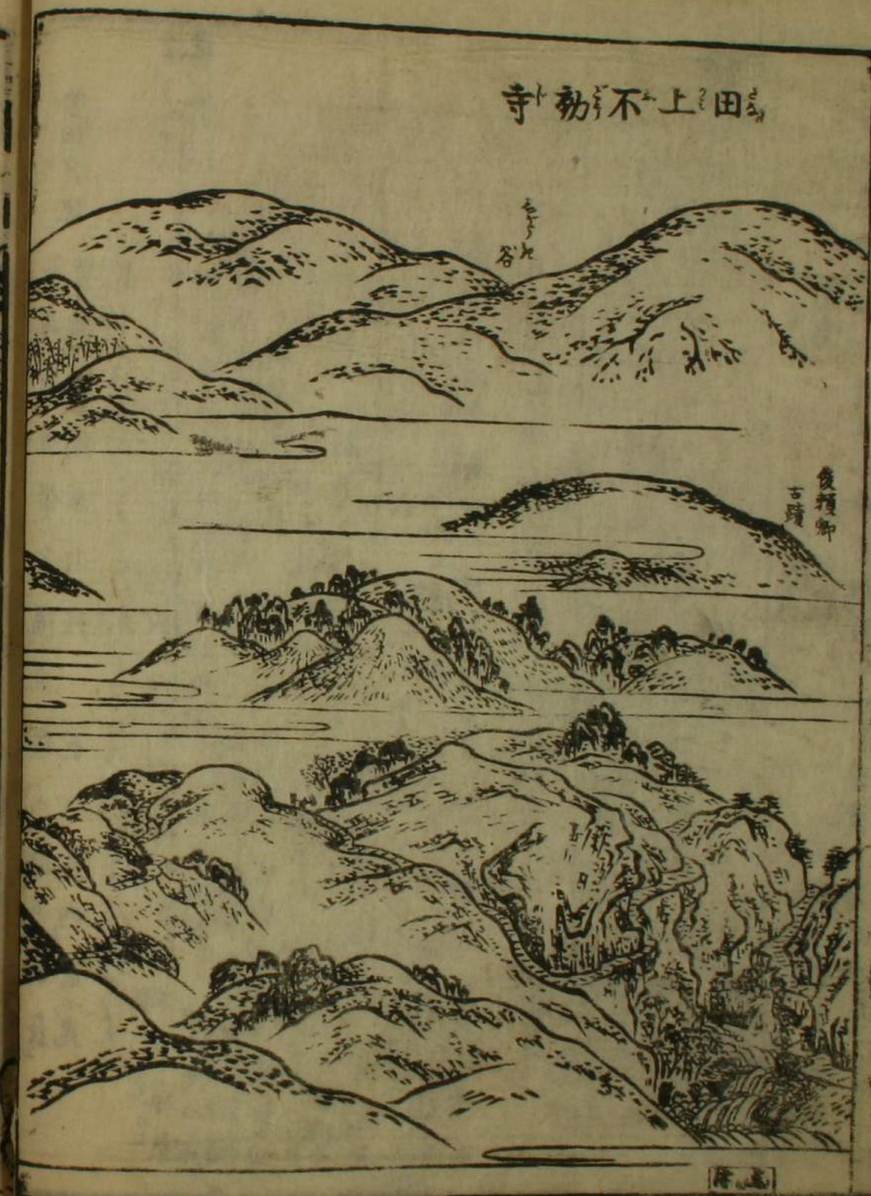
柿本帝城の要遲の時引率 駿優の時 弘元 西行 治承元年 鹿の鳴ひ若久元弘應仁の記みか山橋ぬ代ぬ 黒法 供中 頼 軍 法 橋 供 水 橋 ぬ 代 ぬ 隨 く 黒 法 供 中 頼 と 得 し 武 士 山 國 對 馬 ち 同 天 地 さ の 一 族 勢 田 の 城 秀 ち 徒 ろ 反 ぬ 源 伯 耆 守 ぬ 中 ち 城 し く 武 記 ぬ 口 唐人橋紙通る時外國 廣輿記ぬ書記し 源正 移原伯耆守 ぬ中ち城し く武記ぬ口 廣輿記ぬ書記し

勢田夕照 沙鳥風帆帯夕陽人影與橋長山月一色江天兩景光

勢田曝綱東山月一色江天兩景光

秀郷祠

勢田橋東爪にあり 俵藤太秀郷の妻成記る俵之秀郷姓を藤原 房総とより六代の孫村雄の子 大和國田原 朱雀院の朝平親王將門謀反 の時軍功有く鎮守府將軍ぬ任用 ぬ 延喜八年勢田 ぬ湖中軍 龍あり又二上山ぬ熊松 ぬ 上ぬ 橋 秀郷勢田橋ぬ過るぬ龍出く 龍其勇威と感じく忽然くく 亡しゆくれと預ふ秀郷許諾しく 桑中ぬ 秀郷と湖中龍宮ぬ誘引し 秀郷ぬ 龍宮ぬ 射く 龍ぬ 十種の寶 龍神 成 ぬ 秀郷ぬ 龍宮ぬ 恩成 ぬ


田上不動寺
谷
後頼卿
古蹟

湖水 和名の名湖湖紀ふ七十餘所あり 行基も古詠多し

風波るあかの水海を晴く月かけ清し 沖津島山

きく波や五位照のあけぬれば袁浦うせむ〻ゑ歌も色

五位の海や汀のふち新玉く四位浦五むらこひ浦く

少位の海や素てと称き初明ゆ移ゆくみぬ白ま乃絵舟

月新もうかべる浦の秋あれば汐やくめきれ鏡こゑ五ゑ

湖の海や月の光れりけりく波の花も秋ゆみえ〻り

雲の浦相の波や数花の咲花ゆ月む湖乃海

湖水の一名湖の海或ハ淡海大宮ふちゝ江とゝひゑハ琵琶

湖といへれハ形ゆうく弊〻ゑ東西十里南北二十里堅田より勢田ゆ

至ッく世海く琵琶の鹿角ふ似り勢田より字治ゑ五くいよく細〻れハ海光

尾ゆたゝり在ゆ竹生島あり都く山谷の滴り八百八川勢田の下流ハ供御瀬

黒津南郷と磨く巖石高く聳く両岸の嶽さを鹿巻とゝひ白浪濺り

落る別と宋濯といへるあるゑ流ゆ宇治ゆ至り淀川ゆ入雅波より大洋ゆ曾次

湖水の名春ゆ中ゆ鯉鮒江鮭鱒粘鮒勢田鰻堅田鰕氷魚ハ内脂

式ゆ出く供御と成其外給氷鮭鱈魴泥亀ゆ数数くあり山湖水ゆ

圍む水郷五百餘村佐々木高方ゆ琵琶湖の湧ひ〻むり孝霊五年

一夜ゆ地裂く湖と成同時ゆ富士山現ゑされハ不二禅定とるふ迫江人ゆ

先達ゆ勧しむ善積一郡ハ已ゆ湖と成

日本紀古事記ゆも久〻ゑ見ゑ遠ゆ〻ゑ惣じく河流の水源ハ細くしく

山谷の中より湧る宿給ゆ孔子ゑ路ふ謂く白丈江ハ岷山ゆ落く鰐瀬濺む

ほやとあり山勢田川ゆそれゆあり〻ゑ水源湖そ〻く古来和朝ゆ

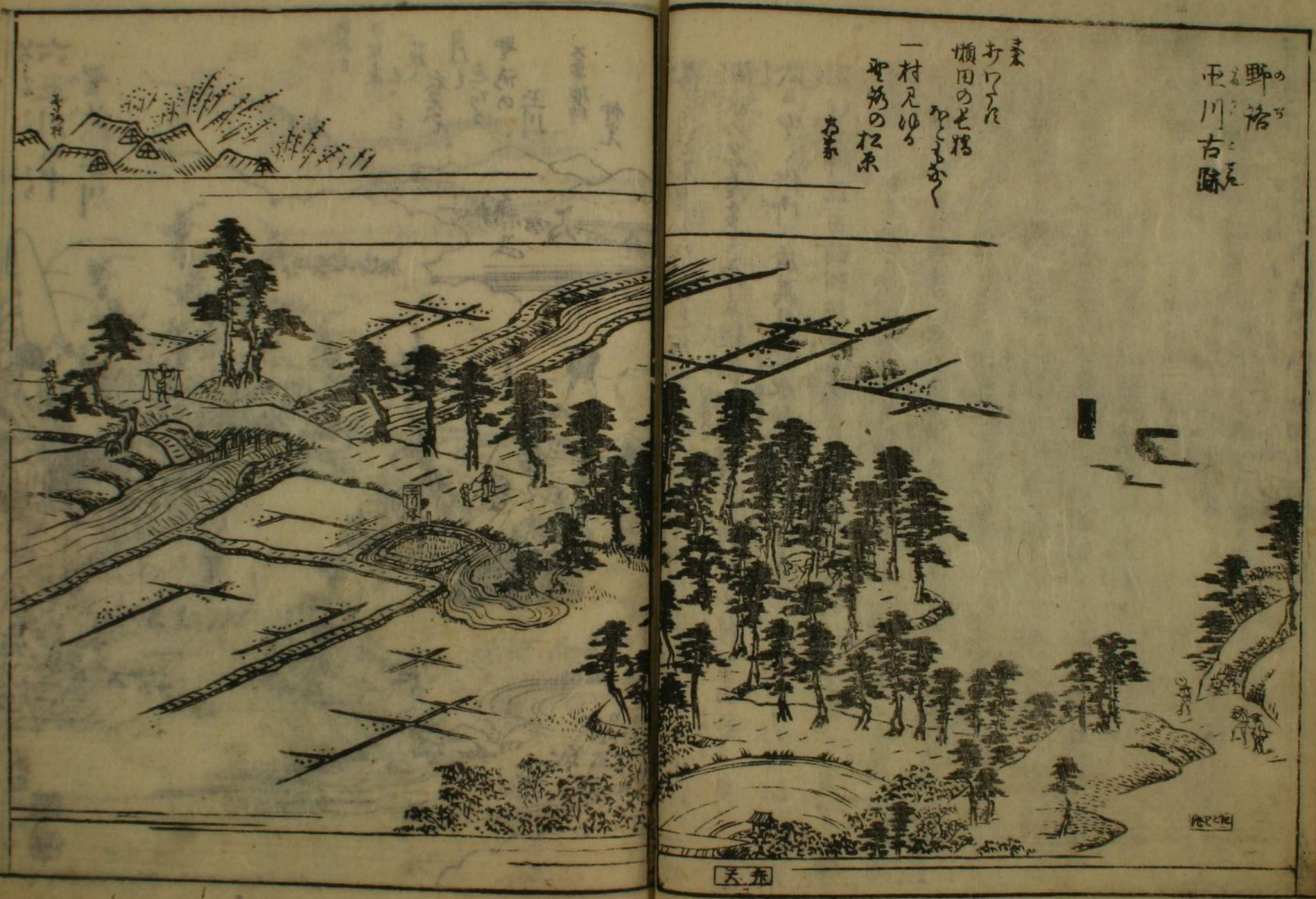
うけうみと称ゑるりのハ琵琶湖ゆ〻ゑ国ゆ又あ〻ひかし

建部神社 勢田ふあり延喜式ゑ名神大社国幸一宮と称ゑ

祭神大己貴命 桐殿姫宮天武帝白鳳ゑ年 貞観九年七月十日従四位下と授く

月輪池 月輪 勢田ふあり大鹿川の東ゆ池二ッあり 月日

ゑの方あり池の中ゆ法天鋼鎮座次


野路
玉川古跡
一村見ゆる
聖徳の松原
天来

六玉川の中
聖徳の玉川

勅撰
さらぬ春の
ちりぬる
萩ふ
秋ふて
月も
色なる
聖徳の
玉川

左中将師
仲光

法橋中印

聖路玉川　聖路里西の河ふかく道の儀ゆ長サ武向半　新帆もろなの帆を一　小池
千載　の流れありあんれあん玉川の方ゆとの人六ツ玉川の其一ゆり

聖路篠原　土人聖路村といふ　後鳥羽院
玉葉　古来和歌の名所

おくれ古ちち人神ぬれくりさたきき聖路の篠ゆら　安部川流

後古　敷ふる聖路の志のつゝふ徒くさに都を養ちも見に　藤原定家

むゝ　佐頼朝卿伊豆國蛭小島を出て旗上の時佐々木四郎高綱都の
おゝ　思ふと人所を怪々ゆ今度部妻へ下らんと愛足しゆが此篠原
ふく　足と痛めつれあんさゆ初旗あんを足もつれさう聖洲川のむひちぐ其馬
きたゝ　都のりのゆくちぐ初旗ゆ弦ちちつたようく
ゆ　ゆんやとの人馬を学くけくべ
おゝ　ゆあの川向ひまをかーア川とつてうゆ
ちひ　川をたゆちくとつてうゆ馬を一てゆ馬
高綱　鞭を打く逸足と出し駆ゆ馬
興味　んく逸かゆ佐ゆ聖洲
おゝ　立く駒を殺ふ馬ゆ
あゝ　この戦ひよ猪利を澤く逸
き　恐い近に國と申うけ
ゆ　寺と立く懇ゆ深を示ひ
他　して制御ゆくと有よゆ

矢橋　岩田ゆ矢橋を里ゆ矢橋に有一を里の渡口ゆ初ゆ年歯久逸ゆして
岩田　佐軍神の時に渡口ゆ頗沖の支逸ゆ

矢橋帰帆　釣一竿千一熟自頭翁辛一苦客舩西又東
幾度風一帆帰去後呂一公榮一達一盃中　相國寺林長老

真帆一く矢橋ゆ人景の真一ゆ一く　近衛関白時殿公
戸津坂谷の人家志賀浦庵岩ゆ　日吉の神社
孫をかく　矢橋ゆ人ゆ比良四時の雪根
ゆ　矢橋ゆ人ゆ比良の生土神ゆ　天津藤原の歌藤原東ゆく
例ゆ四月初卯日神主紀氏護所

鞭崎八幡宮

祭神應神天皇　左神功皇后　右武内大臣　社傳云　天武天皇白鳳四年二月十一日大中臣
　　侵磨　勅命奉くちゆ勅使に其後建久
え年十月三日右ゆ人將頼朝御上洛の時此矢橋ゆ於く馬上より鞭とり御ゆ
神社ゆ人ゆと殺ゆ人　甫人答くあれあゆ八幡大神と申ゆ右大將
有く再神一ゆ人故ゆ鞭崎の号あり同四年八月頼朝ゆト神
一く社殿再興の事神社
攝社　神明社　天満宮　子守明神
　　山王祠　牲子祠　除難井
社頭ゆ古跡あり　白森

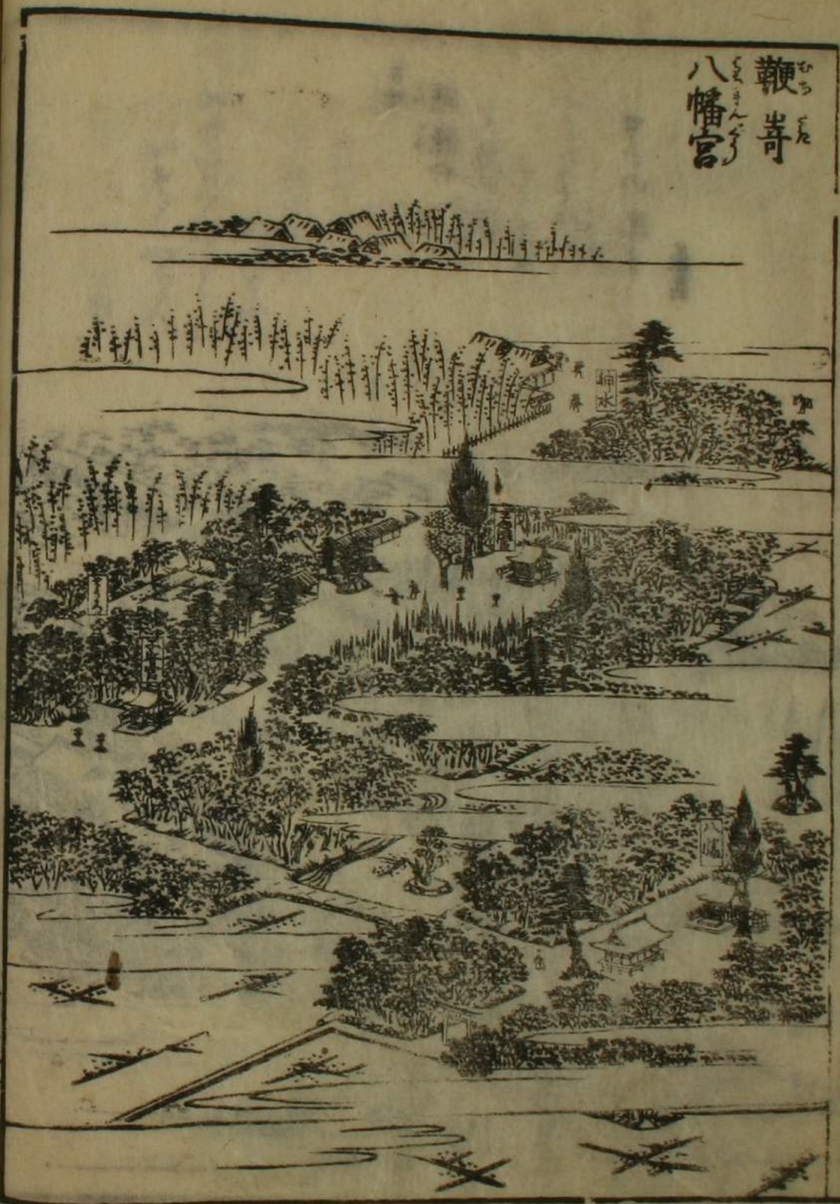
石津寺

矢橋の渡口より一町半南ゆあり
湖耀山と野洗

本尊薬師佛　初ゆの本尊八体比叡山ゆ於く根本中堂と建立
　　のゆ人試ゆ　傳教大師
解　あり後世元禄年中　江戸
松　今ゆより上堂に遷ゆ　二解の号後代ゆ
　　其石仏所ゆ出ゆ
　　ゆて石津寺と号ゆ

矢橋
渡口場
たく波や
矢橋の舟も
出ぬまふ
のりとくれしと
いそくみちの人
公朝
湖照や
矢橋の波
こゆる舟と
いくそたひ
すこの橋ち

鞭崎
八幡宮



石亭

（榮太郎山田みやう矢橋より北門神社の西の方）

山田渡口の村中ハ本門小繋と云ふ家久しき村落あり此人生得弓矢年より
和漢の名石ハ好んで年来諸国より集めあしを数ふ事数十年ハ建べき
位石の彩端風流なりて座ハ松樹と樹いさて先ある書院ハ石階より外
雖箔ハ禁ぶと席上より遥ハ見つるに湖水遠茫として日枝の山根唐橋
の松真堅堅田志賀の都も外湖て居神ハ山田矢橋のつゞく松汀そゝりしく
みる山亭をとてハ此ハ云る石ハ神代の勾璁ハ我国諸州の奇人の国に
産奇石化石天狗の爪水入の紫水晶まてある家ハ飾つゝ小箱ハ入て錦を敷く
塗籠ハ家蔵をる事都て二千餘石あるとも所謂晋の石鼓と呼こ陶潛ハ醉
石ハ外李徳ハ醒石ハ称こ月ハ日ハ朝ハ夕ハ事ハ愛ハ海門真名まく四方
好事の士ハ貴とぶく様こ珍くあ〻ハ賀茂枕く数の石ハ見る事ハ
予も巡行の序に立寄こ石ハ観る人の負ハ入
和漢の石ハ数ふ事ハ
数ハ尺所の二三とあくに圖そろのこ

山田石亭翁
予今の名石家
石怪石好奇癖
都て二千余種
其子の二子
圖
そのとき
海内の好事
あつまりて
觀これ
又他
邦よりも
持来りて
玉を
藏
みとめ
左傳
師曠
石能言
石亭乃
濃州産
月琴石
羅漢石
濃州産
石猿
濃州産
石松
濃州産
石柏葉
現球珊瑚
鉄樹
濃州産
石柏葉
濃州産
石猿
濃州産
石松
濃州産
石柏葉
濃州産
石猿
濃州産
石松
濃州産
石柏葉
濃州産
石猿
濃州産
石松

草津温泉
白井直賢

歩倦驛亭遐
茲休賣餅家
出門還跨馬
到處鼓吟牙

熊谷立夫

琉人泊草津驛觀駒井氏之治人石

草津 江

石部より六里本七町 駅中なれの辻あり右へ曲て東海道へ出る 此辺東海道中仙道名所旅宿通ふ矢倉茶屋は馬上の歌を名物とす

豆床明神祠

宿中ふるう茶屋矢倉の生土仲こん例京に月三日

神人小き民 別当番賢院

祭神 和州春日明神なり同し社護景云年中春日神鹿物うり

新向の時公世の住吉の桃に始く遷元あり〳〵後和州へ移て

日駅中なり成菩提院と号に宗旨 初ハ法相中古真言

今住土宗 本師和恩院なり属に

常善寺

本尊阿弥陀佛 庄係長三尺余脇士観音勢至 厨子の扉に四天王

後の板面に弥陀 近の柳瓜画く 荘麦微妙

寺記云 廊 基長 参傍正天平七年 巨勢金岡の筆なり又厨子の

考云 あくハ仏法弘通の精舎 一梵邪 ハ止宿の所 夏ハ白衣の神人 ハ

故に一年の作 新 走立 遺場 衣裏日神 廉

〳〵 聚 なり 顕 庄 〳〵 山 時ハ神 護景 元 年 十 月十七日 之

光仁帝 寶亀八年 天下大旱 東 より 往雨 あり 中興 正 菩薩

当寺に 後 世布 施 武と 貴 賤 小 後く 布施 と 那 ハ 延 邪 九 代

将軍 義尚公 当国 外村の 鎧 を 〳〵 た 後 〳〵 寺 再興 ある 其 時 乃

地 蔵 る 今 に 安 亀 に 什 寶 に 田 村 将軍の 参 附 〳〵 寺 書 写 乃 大 願

あ 紙 三 十 そ な り 有 後 世 補 写 〳〵 ら 建 仁 二 天 流 の 年 号 尺 号

坂 本 の 細 川 公 紙 あ り 後 に 歴 〳〵 〳〵 建 寺 書 院 名 〳〵

〳〵 〳〵 の

活人石

駅中 氏の家ふあり高サ六尺五寸中うく巾ハ一尺 厚

或ハ云 此石 栗の化石 ん風土記に上古栗の大樹あり 栗の

出る 今に土中 化石の銘 中山亞相公深 〳〵 古栗の出るまゝ公スリモとて 迫年 此

駒井氏 軸 〳〵 家 蔵 〳〵

化石之説見治郡代陣編湖東石亭 考 振 考品類有数 属者迫江国栗本郡草津駅舎

長駒井 者 特栗 化 方と 獲書 観之 其高二

琉孫自然成 亟 蓬 層 〳〵 尺 斧削痕存而不煩

足 愛 鞍馬 明明 栗里 殿 〳〵 〳〵 〳〵

[illegible]

鈎古城 鈎村あり足利将軍[illegible]

小世寺 小世村あり石湯山[illegible]

本尊山観音 長六尺 聖徳太子の作 [illegible]

梅木 是齊と本家くつ

紀り

さてさへちらぬる後の恨みを[illegible]

あたえ和の比梅の木あり[illegible]

[illegible]

二上山 梅木の東山を里詳みあり一名石足山[illegible]

ちらぬる後の二上の山はさらぬ[illegible]

[illegible]

二上山の山はひ[illegible]

[illegible]

御上神社 九座の内名神大月次新嘗[illegible]

祭神伊弉諾尊 古事記日開化天皇要道[illegible]

櫻 二上山の櫻ふ[illegible]

[illegible]

二上のさくらの花咲匂ひあり[illegible]

草津
夜
曲
東海道
直
岐岨路
名護屋
中仙

新吾光寺

高井郷秋村にあり
浄土宗鎮西派

本尊三尊弥陀佛

長さ尺六寸二菩薩も共に
信州善光寺
佐州善光寺にも日無く
侍抗之仁治年中に北条小松左衛門尉宗定とりて剣士あり毎常欲願と極楽
往生成つるに願ひ信州善光寺
安の爰ふ生身の三尊仏現と石の
菩薩も共に寶冠を戴き般若
経々うり是を身の出来と般若
し同爰と足しらば分身の仏
ゆうり一宇が建く新吾光寺
うせて名づけうり

石郡

江

れにまで三理十武町驛の端に金山村あり中古銅山坑口あり
石郡の金山とは人今の上道八十年ぶ間ハ前く下道ハむうりの
海道にしく左に横田川の流あり
横田ふいしく沿の東の蓋生に松風さむ毛初意しも

石郡鹿鹽上神社

駅中田郎に鎮坐に延喜式内之今一所社しく下の社ぶ
古老の祈上の社と古昔四神土人虚空蔵と称次宗神
生土神
例祭四月上巳日

金勝寺

金勝村の山頂にあり石郡
良矢伝正の開基と後世極楽
寺

○閼伽水調貢

海年正月十五日 禁裏御所の供御に閼伽水を調貢しまつる事
昔ふるしに水ぶ流ぶ故ふ
沿でなるに玉走して救ふ故ふ
基氏と名ぶの玉川くらく新あり

震巖

檜木
所の名れ檜木は
氏れ角つのひのきの
字の名れ是なり
茶れ名くあるをえめる
るハ御坪夏或ハ
小田原の外うり乃
たこひ好んち

金陽山
震巖
金陽寺山の
巖岩の数十人の
ちからかりても
動せらるゝ事
動ずるを怪して
催れる頭ところく
抑せば忽動だ
動くあり
春泉画

揮塵錄ハ日
宋の政和年中
壁縣より
一巨石を貢ぐ
高さ二丈六尺
動ず或人のこれ
を怪しみ卜筮
をくよろしく
表帝と云へり故に
題して慶雲高龍と
号して金帝とりて
其上に祀て動をも
動ずして其中に
至るまでこの祝ひ
比せん

阿弥陀寺　金勝村にあり。金勝山と号す。浄土宗。恐〻〻〻山の中にて〻〻〻〻金勝七谷といへり。出谷開闢の地。

本尊阿弥陀佛　文明十八年に画上人の建立。足利義尚の寄進。結信のうへ後土御門院へ奏し勅願と賜へり。天正九年の兵乱に荒廃に及ぶ。

西寺　甲賀郡西寺村にあり。石部より十丁町西。阿星山。常楽寺と号す。伽藍の古礎多し。

本尊如意輪観音　仏殿の北に仏殿正の南基に仏殿三層塔楼門金剛力士を安置。堂形仏像古代の作なり。

東寺　同郡東寺村にあり。阿星山長寿寺と号す。当寺の西南に阿星ヶ嶽と云ふ高嶺あり。故に両寺共に山号とす。

本尊地蔵尊　傍に原。聖武帝の勅願所なり。古代の仏殿今は存せず。仏像多し。

大石塔　谷に宮城の古蹟あり。堂あり。聖武天皇の御骨を納む。

鬼儺　正月十五日夜。禁斎して赤鬼黒鬼の面を被て鬼の舞と云へり。式あり。仏前に於て大鼓を打ち群衆を集む。半多し。

桜櫻　堂あり。石大将頼朝より江州檜物屋を寄附。

美松　街道筋栗太村山中にあり。又松尾明神祠あり。亦年中花を付て折る人もなし。

玄蕃丙倉

異松と駢る半ば松の葉細く艶あり。四時変ぜず蒼々たり。松の高サ大樹の根より四五尺にして株常の雄松の如し。枝々数十ありて近視とぶ蓋の如く遠く眺めば側柏の如し。始皇の封松李斯の孤松なるか。

賀茂渡の定樹　異なり。渡葉は雌松株は雄松其雌雄分明なり。緑葉にして同姓生じ仏中に添へり。惠同林と隣山に多の松あり。英松一株もなし。又他所へ移し或は鉢植にもなる。

山城と守護遠近あり。未だ初て観る人賞嘆せざるなし。

裏見　村の名。仁和寺の裏身と云ふ。

日吉霊蹟　三雲村の神祠なり。四年に一度の例祭。

妙感寺　三雲村の南。妙感寺村あり。

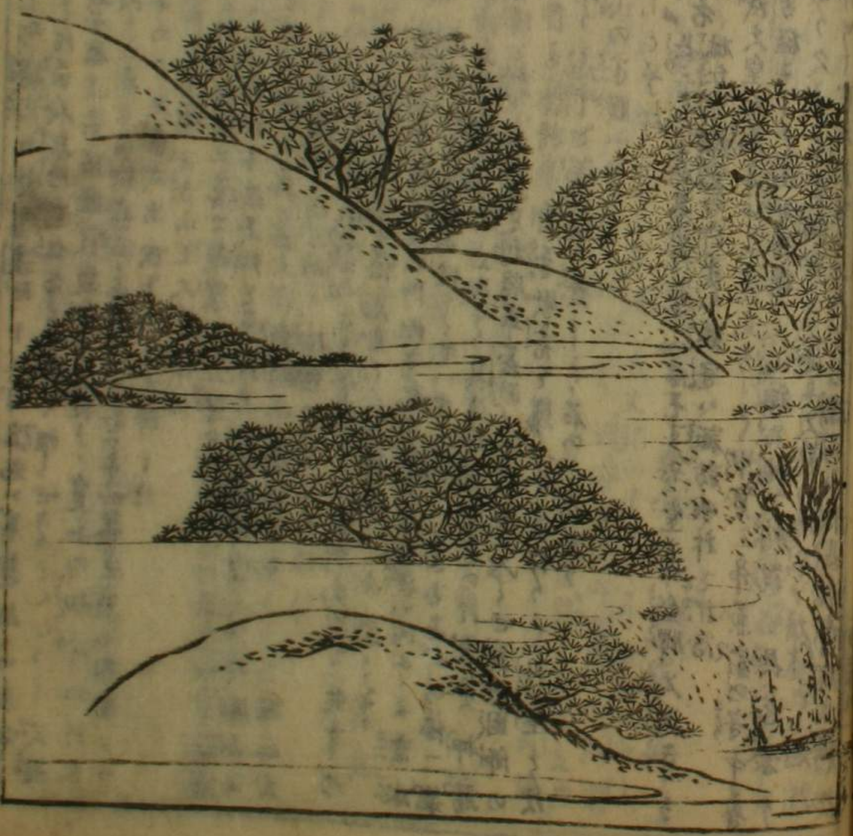
本尊千手観音　長七寸。仲祥定朝の作。荒廃の後中興仙峯竺頂和尚。

万里小路藤房卿終焉地　当寺の古墳あり。建武二年。後醍醐帝に諫奏あり。藤房卿終焉。

太平記及び吉野拾遺ふ又〻うり老法山〻へ帝うり賜り〻〻悪の徳〻〻尊〻〻〻

平松山天拓

ふるしい
松のふるゆき
たまうん
さしかけ傘の
枝ぶりのよさ



水口 迦江

土山より六里半十一町　縣内社格町　裏町十五町　名勝に菖蒲細工の店あり

珠小釜岳とうしろに聚人郡西郡秩父位命この嫁く他せくとしつ人間

山城ふ長東大藏少輔正家居城故有く廢し寛永の初今の地に

仲再營ありつく同十五年より御番城成真法天和二年加藤虎嶽居城より

水口神社

縣内西の方あり延喜式出雲神の生神なり

例祭四月上申日祭神日吉山王大宮権現

美濃部天滿宮

城内あり社伝云菅丸官衛

眞一方秀方涼義卿をあれ系伝に神十二の中は御水

孫ましを行ふく仏法郡の郷あ者ぞ郡村あ鎮の系くく伝れて

後ぜ人のま孫も今美濃郡村せ石ぞ山人間

蓮華寺

城中東の方あり宗旨天台宗中古田氏水口太子堂と号ず勢州古田氏の能寺の

相州にて初い台宗天正年中天

本尊阿弥陀佛

長二尺重徳太子の作仏寺記云皇太子巡視の間あ霊水

涼潤

と刻て安に霊水ぞ湧ひて水口の号出さうり其法神護系玄の忘勇神勝

退居作のるみ三層塔を創しぬ又足利将軍義政公も出るみ入せ者想国師の

墨跡北殿主の御見観者或は将軍自筆の歌書を賜人今も伝りく什宝と伝る

又小瓜遠州ちいた身り居中と遠る今慶しく石のみ存せり

大岡寺

驛の東大黒山の麓ふあり

天台宗龍王山と号す

本尊十一面観音

長二尺八寸彩墨の作胎中の像年号等堂上の金牌大岡寺ち

林丘寺鎮宮の作まと鎮宗ハ薬師如来と称す

寺説云当寺ハ天武天皇白鳳年中の建立なり甲賀之郡兼家の守本尊

とて仏甲賀之郡豪猛なりく山神と戦殺し其怨念

本社飯道権現

延喜式名帳云飯道神社

神躰然野三所権現

長明海道記ハ衣笠に大鼓とうつ鳴るとうつ鳴るとうつ鳴る

の衣曲ハ侍る半と楽ての詩ふ感じ仏大岳の宗社宿の

奥道の有たるり

○梅ふ仏者のそ彼もうつ仏越○ふつ仏

将軍実朝ふ謁とあり弘ふ仏十二年後ふ仏方丈記ふ建暦一年鎌倉日記の山

の奥ふ山居し方丈記と申れり半然

補遺あり仏人の仏と其疑書を澄りく長州の奮跡と石仏立付

半巳潜ひ

近江甲可郡尋得義綱於大岡寺出家ハ九日義綱配佐渡

仏義綱ハ賀茂次郎義綱虚舟仏蒙

つく江州甲賀山に籠る陸奥に弟義朝とうつく討ひ

其日ハ横田川ふ陣ふ軍の合戦ひと

仏等の賀茂次郎と戦りく明日巳の刻ハ極ひと

又長明道の記しうのあり

伊賀守従五位下源光行の記あれも依書ぞり多田満仲大代の孫

惟中が續無名抄云賀茂長明道の記り

東行の源光集の中の白雲の詩れと歌書みふ源光行が

亜名抄方丈記仏二書の

水ふしたるの抄

遥拝山飯道寺

水口より南三里あり三大寺ぞり宝年五十四

本社飯道権現

延喜式名帳云飯道神社

天台宗日光門跡ふ属仏

神躰然野三所権現

本堂 某師弥陀釋迦十二神將作安置

大師堂 元三大師を安置

弁財天祠 高山金剛院に安置せる像にして伽藍鎮守なり織田信長の特尊と其時高山の張徒加勢しく攻撃あり其恩賞として久秀に与へ織田信長押寄遂に山城の地成り移る 故に地主の神なり

大黒天像 初めは蒲生郡鉢長者の持尊なりしが高山に納め祠祭を修し諸堂建立ある毎月毎に院中をめぐらす

守護に山王祠 本堂の傍にあり 白山権現祠 山王の傍にあり

嵐王堂 山の末腹にあり 末社十八柔 高山鎮守にあり 影向石 本堂の上にあり

護法石 本堂のみにあり 龍池 本社の下にあり 閼伽井 閼伽井なり

錢樓 南谷小向禁四神の祠あり著しく 杖樹 水口道の傍

足跡石 新向石の傍にあり 石南谷 谷小石南の大樹多し滿開花 道標石 八石比丘の造立あり 山伏落 本社の法験難の地あり高山は悪僧の

抑高山の開闢は 元明帝和銅七年八月十五日天童妙相成現じて甲賀郡聖嶽に宝殿を護持し新向にまして齊宮なくしてあり 然聖権現の霊岩成影り宝山に其岩小云飯を盛る形路傍ゆえ

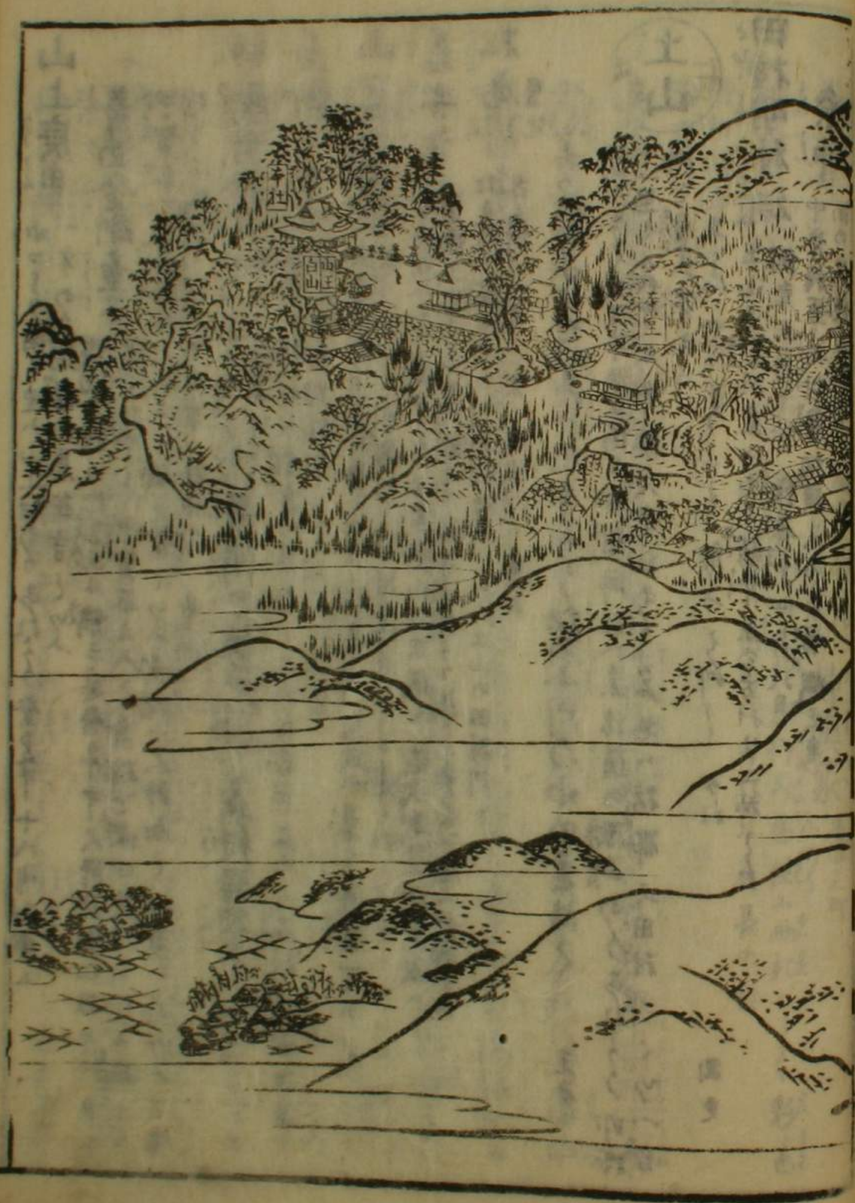
齊宮が登山をふ柳の若飯を盛る形なれゆえ道の標なりし宝向石の側に然聖二不権現を勧請し故に飯道神社と称し厳后 聖武帝信楽宮に遷都し時に王城の鬼門守護として天平十五年八月南都興福寺の安皎法師登山し伽藍を造立し本郡の霊場なり

文徳帝の御宇に飯道神社に位官成授け礎礎の聖賓尊師徒弟高山岩本坊梅本坊和州大峯に随身供奉し中興に成り九月五日に今日至るまで山日笠を肩に社家に渡る例式に成り渡しとして

當山の開基は良辯僧正安皎安峯三世相續て住職し中興は光定大師に悪霊人師の徒弟 近衛院久安年中飯道権現の勅額を賜ふ 今宝蔵に時甲賀の惣社に成織田信長の初頃光信あり登山し多年坊に寄宿し神領に寄附ある事古記に見へ

峰嶮しく老杉苔蒸う梵宇寂寞しく若蘚蒼く丹青の彩の雖

空しく見れども神徳むしろ今も変らざるを知れり



えぎト
飯道寺

山上庚申　ゆにくう南を里ふ山上村あるくまれくう登る半十八町山頂ふ

青面金剛童子　一字あり瑞應山廣德寺慈恭大師の作岩面ふ鐫そ延暦年中大師比叡山根本中堂を造立せんとくく甲賀谷ふ入く良材を求む其時あれ人鐫ゆし甲賀谷の一名花谷といふ又磯の尾といふ又釋迦ヶ嶽ふ入給ふく伽藍を建ん古跡あり又花川といふあり真の横田川へ會ス

義經腰掛石　ゆにくの赤き里小里村の景清力競石あり義經腰掛石ふ前ふ

義朝洗首水　稲川の側ふあり熱宮の峯島くあれ人吾ス右の三石ハ清水共ス

山口重成碑　右の首あくひゆの傳ふあり山口志摩重成の墓ス慶長中ふ人碑文若干して銘あくス

慈安寺　お堂村ふあり禪宗字法華山の末寺ス延宝年中ふ建る所ス

重德王四十二年の作ふあり拔丘寺宮ふ移ゆの寶器と稱ス什物ふ

松尾川　松尾村の端ふあり一名内白川と号く末ハ横田川ふ會ス

外白川と号く末ハ土山の田村川を

署記

若ク代の子ク名れ色ハ出ヲ々ク松の小川乃水の表ハく　光度ス

坂のトヨく武里半西立場ふ多賀の神社ふ赤絵道の標石あり

十一里ハ高中ふ半頭ス天皇社あり名物ハ柏餅又田村川といふ名

（迫）土山　土山や　有りみも　土山

田村明神祠　土山の駅ふ東ふあり騒中赤の方ハ生土神ふ

例ス正月十八日　鈴鹿紀四月八日

絲神　中央將軍田村麻呂相殿赤の方ハ蛭ス天皇

西の方ハ鹿川

神地堂　十ふ観音と　赤社　稲荷の大明神ふ　神遊家　あ小之町

神寶　田村將軍傳ふ右ふ二鬼ふ端殺表補笑繁くス玉篇一無あり

烟珈將軍家ふ賜る

珍瓏なる名品あり

支岐社領坐の年歴同記ふ所見ふ　往昔延暦年中奥州安部高丸王命

ふ叛しゆ田村將軍退討ふして駿州清見関まで到ふ合戦の時清水

観音霊驗の事あり又一体和尚ハ強盗ふ遇ゆ事旁陽雜記ふ

ふるるふ又田村の話曲ふ田村丸鈴鹿の鬼神退治の事ふ作ふ附會ス

神祠ふ建ふ又人　或ハ三天正の比為岡安土山ふ織田信長ふ城の内田村川

遺　のむひ今の往還のふ古道あり双ふ

の鬼神鹿山の鬼神田村丸退治の事ふ久く世ふ有ふ今ハ里人安土街道

迫郷ふ移ふ路傍ふ祠と不田村將軍の傳ふ續日本紀王代一覽元亨釋書等ふ

建しふ

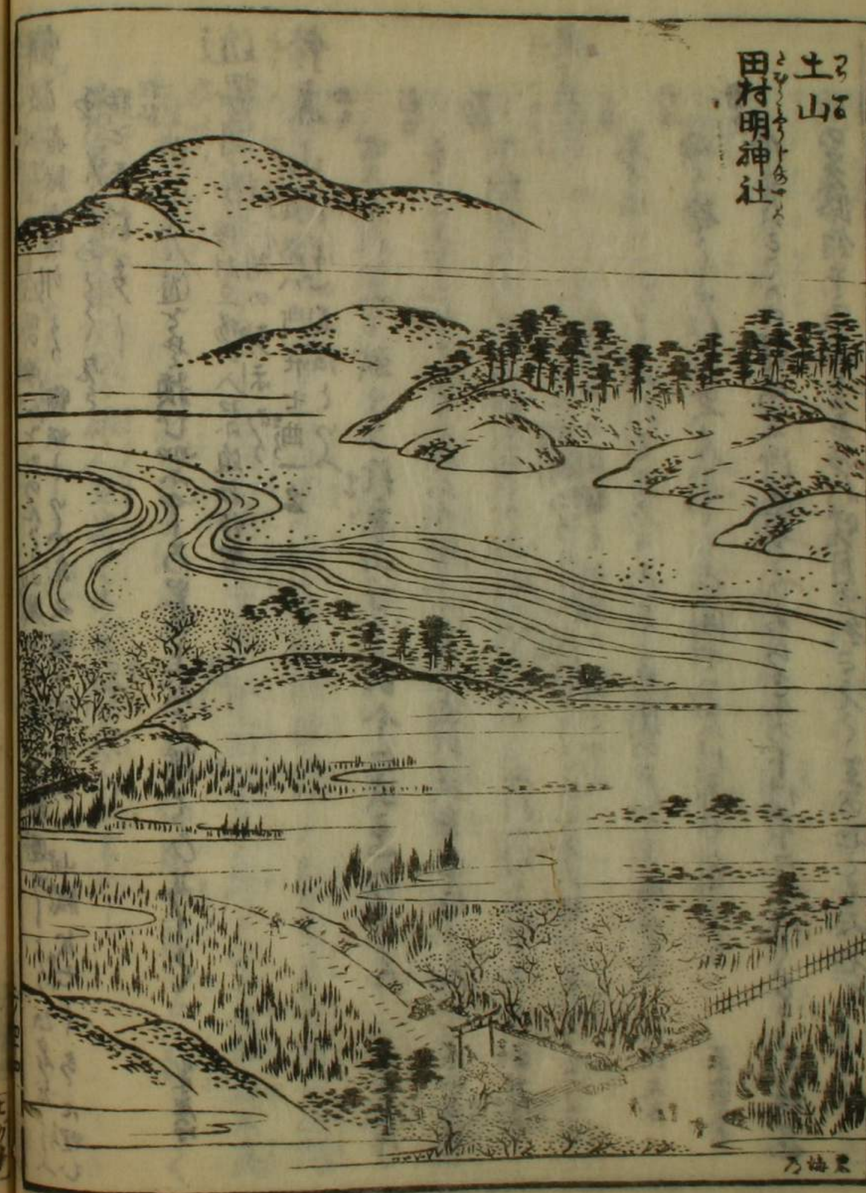
又人ハ詳ふ記ふふ建ゆ田村麻呂　桓武帝の外戚ふ忠肝義膽の人

且勇威ふ一ハ一ハ眼を張て怒ス人ハ猛獣も身を縮め四足を縛む一ハ笑ス人

幼児も親ハく慈母のゆくを面貌ふ一ハ笑ス人ハ関羽のゆくを面貌

鬼公従〜とつの人古にあり〜まず　天智帝の御時逆臣藤原千方に金鬼
郎鬼水鬼隠形鬼の四鬼公隨く伊賀伊勢の間に住て王命に背く紀友雄
に詔あり〜千方を討〜む友雄一首の歌を詠く敵軍へ贈る
　君も来も和大君の国なれば〜ばくら鬼のをみちある色に
鬼等あれと唸〜感動〜てみな散るべく去ぬる千方勢を〜て友雄に討たれ
役小角に呪縛〜て若鬼後鬼を従へ源頼光に四天王を連て大江山の鬼神を戮〜
渡辺綱に羅城門に鬼の臂を斬平維茂に戸隠山の鬼公誅に山田村麿に延暦
十六年十月従四位下征夷大将軍に叙〜弘仁二年五月大納言右大将と成く
逝去に年五十四　天子三日涙園に入せ給ふ唐魏徴に比〜て爪牙の臣〜古墳に己州
山科の南栗栖野にふかう若羽山清水寺に坂上田村堂と称〜あく原田の仁公高
麿と云へる者共〜もつて故見える産明神の寛命あり神威霊験日々に新〜く
桑宮の宮関東関西の旅人立寄て拝まる〜ば〜
田村川　和泉国古義の山中より流く紀伊川と成く　紀伊国田村

解　阪　成　賊　人　暴　逆　山賊盜く旅人を暴逆〜て〜ひ名公七〜ちに埋む
　　毒賊の模様に坂の喉をたのん〜山賊盜く旅人を暴逆〜て〜ひ名公七〜ちに埋む
　　坂と〜て〜先又傳ず盜るものの山賊公七〜ちに埋む
あ〜ん名おく〜く名を　紀伊国
　　賊と黄家多〜
　　りばん道を頼む如ふ中ろ岩の上公を横をひ〜く　宝暦
迫野国博　塔村之場の入口ふ迫に伊勢
　　二州の封示あり
鈴鹿山　阪路八町　七曲一名
　　津加茂坂と〜て
　　世ふ〜れいふ〜も就々り鈴鹿山ひ〜の今に成るあ〜ん　鈴鹿山
　　そ〜ふ〜ふ〜ふ


土山
田村明神社

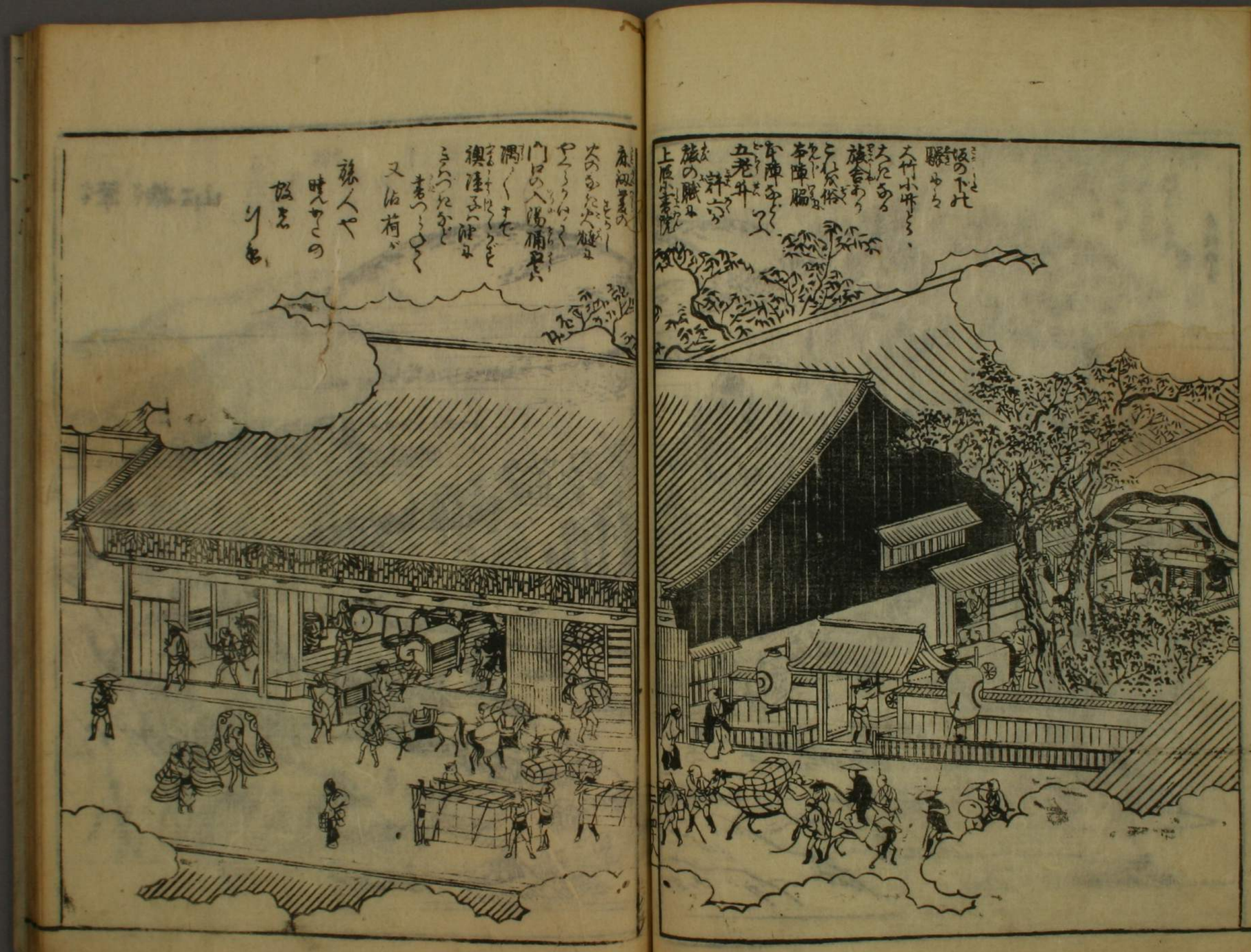
田村將軍
鈴系の鬼神
退治の事
実説あり
くしくしく世の
人ふ贈与
そもそも平
うれ観音
の仏力

観音の
夫さ
面し成
酒くあって
鬼殺しく

鈴鹿神社　摂州於茶郡　於茶山ヨリ延喜式神名帳ニ所山神社
坂下駅中の生土神　例祭二月八日
於茶川ふうさみ又ハ神路山　榊茶多く出る国ニつき　信濃記
後法興院
祭神三座　中央瀬織津媛命　左右ニ気吹戸命　瀬織津媛命
相殿侯姫命
鈴鹿社　祭神内外太神宮天神地祇　攝社　山祇命　編者
石巻の神と記ス
愛宕
頓宮殿　邵憲の右の方
頓宮ハ神宮ヨリ
いそぐらも多ふ　ふ　ん　旅路をる芦の刈り不ル和葉散々り
羅山子神社考云尚社の傳記ハむ　天智天皇帝位と皇子淨見原親王
小禅ヶ世ハ然ル皇子大友軍を復して清見原宮ハ襲ル皇子吉野に遁
陸奥真くり伊賀國を経て山ヶ山ハ到ル　あ　に　案の居を結ぶ翁と姥ハ
皇子吉野宮ハ　ハ　給ハ　ハ　ハ　

春後雅有

鈴鹿社


坂の下れ
駿ゆら
大竹小竹とろ、
大たある
旅舎あり
こ伝馬
本陣脇
宮陣あり
五老井
祥山の
旅の賦
上原小素院
扇風器の
次のふたゝび進
やゝ〳〵
門口の入湯浦君ハ
隅〳〵まで
奥座ふ油
ふらつたなど
者つゝ〳〵
又治荷が
旅人や
晴やこの
坂を
り

猟師家
筆捨
捨て
所を
捨て
圖する
無法服

筆捨山

伊勢 坂下

拾鹿坂下と関とやそ里半ばに駅あり〜〜〜

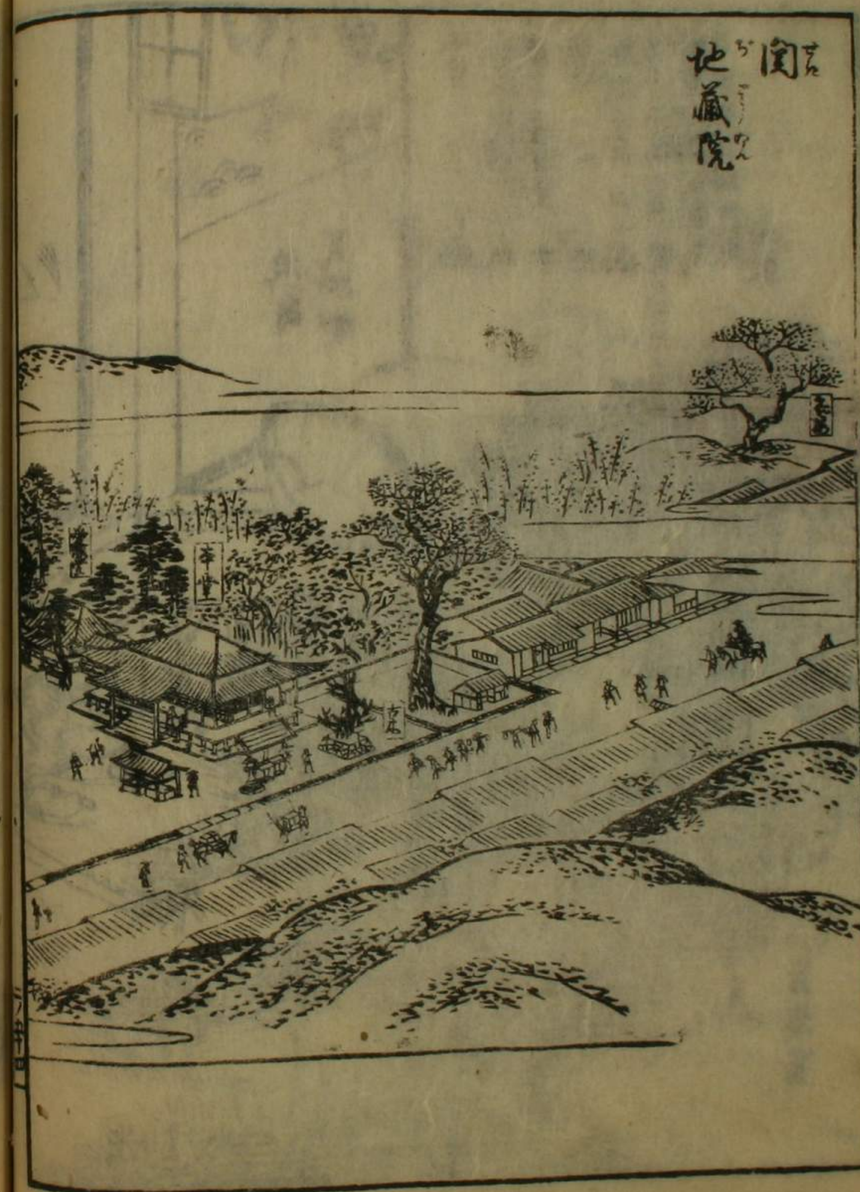
の罪障悉滅し給へ則一印を授るあれ光明真言の正字を應宣爰賞さく感涙
袂の袖を浸しまれより霊岩を任く有縁の衆生に與へ今の六道の名判
まれ延長五年小別当阿闍梨宥應に示現あらて曰我南提救世の悲願
と発し六道社化と成へ在悪の衆生を友とし故を往来の阡陌に遷さく
しと発し於是鈴屋の関屋の側小堂を営く安置し中に供水しそ山号と
し阿闍駄も所へ改る年都へ九ヶ度を建へ故ふ九聞山の号あり中古此
を傳盗賊の為を行方を知れに其に別当職穀を断く年産を選しかる事に
頻ふ祷る忽に示現あらく当国白子の浦を早く建めと霊應あり彼を
其曙かの浦の漁人ゆっく云辺に海上に数々光明耀そう其光に於暴く
網に下を地蔵を海う貴様聚りそ護し年産選しき仏霊験
古今を竟しに世さての人信して関地蔵を敬礼しかる
一体仏
猟を荘厳裏幣しかれは里人集りて仏和尚を修補しまるる法華経
一体仏に供の傷れ者をしかるに開眼供養をへ
一体仏に開眼を施しかるに

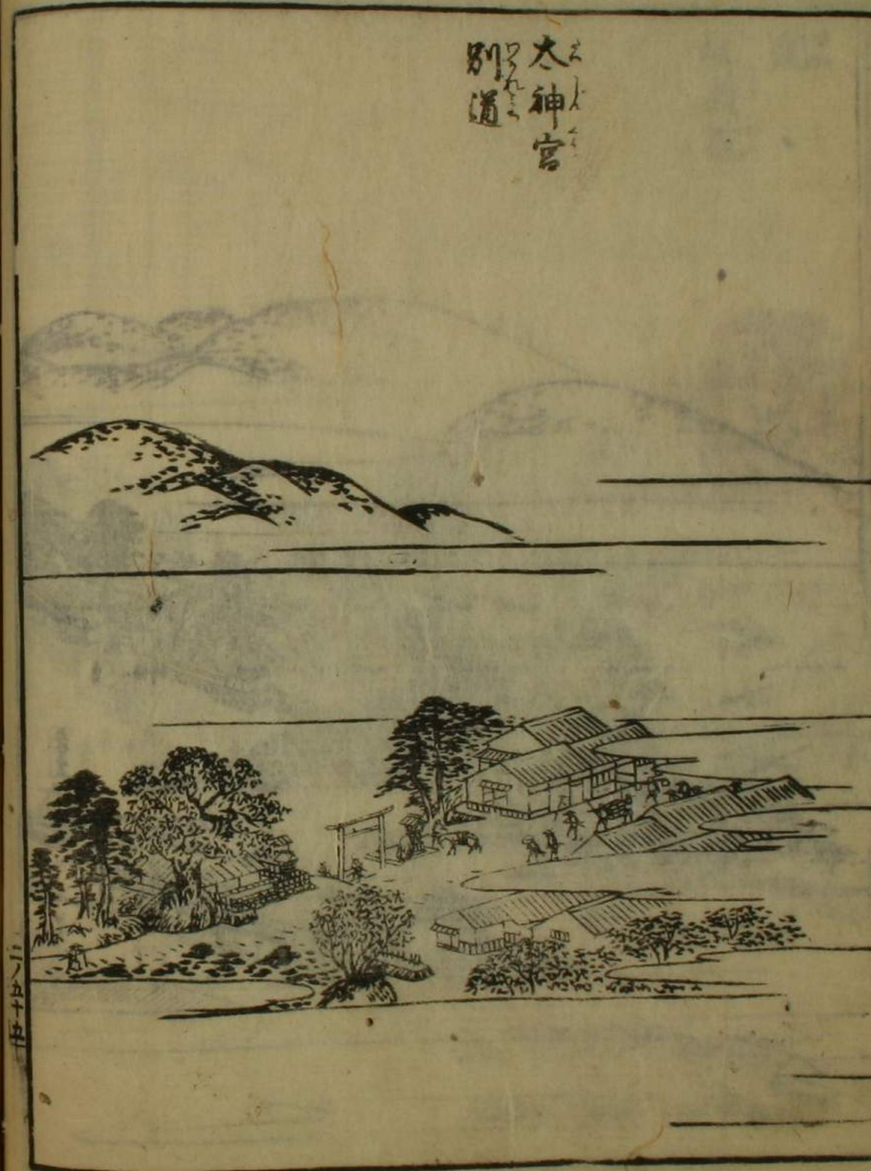
向ひく仏のと祭ひ奉くて
穢迹ひそに弥勒ハいまこそぬ方れ
供養と申を半ハ威儀正しく紙ともしみ其外をくの他器あるべき
半あるを別けもあに方のよみちしひ清めく又荘厳彩色しあるうちに寺の
傷ふかと人くあり開眼を改めくの傷ふやしく開眼を施しくの傷ふ
僧仏やしく開眼を施しくの傷ふ
製装ふ産具とうそく猟の猟者とおしまり蔵登獲紙をのとあ
ま具とよみ高を上昇を登獲の紙おるし鼻うちのとふ
りしと出しし地蔵紙をあく脱のく追浸らしく落向しく
ひ所の老男女いのちい仏和尚の天人ふひしく今剛不
ふ仏の猟へ海のうれひい具名ともきに田畠ハ穢に穢さう人雨郎の猟
史鼎祝鼎のそれもおくしん海くやし平尊い将軍地蔵あり
たしい大数弦盗ありしいへしたちっぷたやふる半あるべうに
あんどうに半がそろへくいひちし廻向のの
くれを就人ふれらそ海こしの開眼供養あれしく廻書の
ふがくの具数至所中の者ふ地蔵しつきうひにし
いく名傷のく為うふうしく目をあたるりの人いうのいつ
供書ハ海よいしくのぞくふるしてのせといひて
猟ひ名傷とた人ゆ猟さく一体和尚をうひのしく
くく書名ふく廻身猟ひふれでふれうる半ふ
所を三廻とのへ山幡鼎禅をとふ猟へ地蔵ろ
海たたのけよといひのう人を里人ふろふ地蔵
いさしくれをたちゆち祭ふ今し蔵のふれを
ふしうへいはいれ
ふしそ為しか

馬士の桃命
常ハ
変態
馬の口
生涯

日々
旅ヲして
旅を
栖とし
月参議
議
雅惠亭

地藏不及招嬰榮
欲買相談約束成
寂處蒲團燒一枚
來時太敲已三更
羅繻寶帶數千蟲
雲雨巫山二百情
昨夜幻妻今曉見
目珠飛出頓如髻
月渓畫
泡鬼
買招嬰


関地蔵院



太神宮道 東の入口にあり 太神及び度逢の宮の堂あり 伊勢太神宮の堂あり 五十鈴川 山田外宮より七十四里 名所神楽 石 伊勢太神宮 黒権現 観音像 東海道

出羽森 小堂村のふたおとり森あり 羽川 羽黒山 出羽森 古墳あり 山田

古馬屋 関川の南にあり 村の名とす 天照太神五十鈴川の上へ遷座の時 縄十八町あり 右に往古馬屋あり

布氣神社 堂尻村にあり 延喜式内 今皇館太神宮と称す 例祭六月廿一日 天照太神五十鈴川遷宮の時 祝宮の古趾と

庄野 さぐ代里 亀山宿中十七町 伊勢方の方に城あり 慶長の比 岡本の野宇 今は石川度主城 人居城せり

亀山 亀山城 中富田村の門 八王子 洞あり

森下 中富田村の門 八王子 洞あり 海道 向に走る

庄野 伊勢

白鳥塚 庄野 十町 日本武尊の 陵の土人 能褒野 日本武尊の 陵の 拾八 向東西八拾九間 南北 今ふるかり 日本紀 亀響のたぐひ 出る 神の方に高 武天 東西六尺 中武天 社に石 奉 建 奉 建 倭の古 倭の 倭の 倭の

詩土人ホ行ヒ場トシテ又陵遷の傳ニ石造の小祠あり導の堂と稱し
ゆく所堂とて今も在り權現ハ其内又其前ニ
在し所あり
古事記ニ
日本建尊自阿豆麻幸行而到能煩野之時思國以
歌曰夜麻登波久示能麻本呂波多多那豆久阿袁
加岐夜麻基母禮流夜麻登志宇流波斯 又歌曰
伊能知能麻多祁牟比登波多多美許母弊具理能
夜麻能久麻加志賀波袁宇受佐勢曽能古 此
歌者思國也 又歌曰波斯祁夜斯和岐弊能迦多
由久毛章多知久母 此者斤歌也此時御病甚急
介御歌曰袁登賣能登許能辨介和賀淤置岐斯都流
岐能多知曽能多知波夜 歌竟而即崩介貢上驛
使於是坐倭后等及御子等諸下到而作御陵即匍
匐廻其地之那豆岐田而哭云云

丈日本武尊ハ景行天皇の皇子なり御母播磨稲日太郎姫の初の名を
小碓命と申ス其の名ハ倭男具那命とも西の方熊曽建の兄人勅ふ叛多し
尊童女の姿ニ身を粧ひ其家に入て酒宴し懐より劔を出し其胸
者ハ平げ是より倭建命と称す其後東の方十二ヶ國の荒夷を平げ
御凱陣の道ハ遠く御悩あり終ニ伊勢国能煩野ニて崩し御年二十七歳
天皇大ニ哭し群臣ニ命じて葬し給ふ忽然として霊白鳥と化し
て倭國ニ飛り群臣其棺を開ハ空しく屍ハ明衣のみ留り白鳥
大和の琴弾原ニ陵を作る白鳥更飛ぐ河内國古市邑に至り又其所ニ
陵を営く時の人ハ二陵と號ス白鳥の陵と云ハ日本紀ふ見へ
和名抄國郡志郡名所圖會に出せり

高屋山瑠璃光院石薬師寺 石薬師駅の西ニあり
本尊石仏薬師如来 長七尺八寸 奥言宗 泰澄弘法大師感得の霊像なり
寺記云 彫刻 石仏なり
当寺尊像金輪聖王出現の霊石 至武帝の御宇神龍年中鎮の

泰澄山所と通りゆふ霊光暉々たりて所を分て求めに泰然たる樹林
の中より異香薫じ十二神将あらはれたゆひ一箇の霊石に拝く泰澄
感悟ゆひ末世の衆生利益の為正しく醫王尊の示現なり速に一宇に
創しく霊石に安置其後弘法大師泰澄の蹟を追ひ霊石をりに醫王
の尊躰を彫刻し相好具備ゆへ開眼供養ある其より霊應日々に新
く遠近の致礼稽麻の如し山由 峨嵯帝の叡聞に達し特令僧房堂建
あり永寺号ゆへ中古焼亡永兵乱の比蒲冠者範頼の上洛の時土くに
埋し丹誠を凝し武運を祈て携ひし鞭に倒れ埋さしゆへ今ふ
枝葉栄て迫くに大正の兵燹に罹く佛閣一時の煙となる幸に本尊
光を免れ燼中に悲歎の涙しくる真に住職圓賢法師の智徳の沙門
なるに対し中に示現あり秘法に教ゆへ精進を加持し世上に與へ病邪に
そそひ殊に乳汁を出る事瑞の如し法師感賞に教の如く世に弘む
古仏霊石師の八刻果て八一柳直盛度当国神戸居城の時種々の奇特を

感じ本堂院内再建ある又寛永六年秋九月十四日夜当国四日市浜田村
の長谷の果に羽を落る十七日夜風雨頻に起り駅中の人民死亡をぶこと村雀
多く其夜疫死に代ると示現あり翌日当寺に詣く羽のよしと語る別当も
同夢を感得せり果して十七日夜暴風驟雨忽たりて其時竹林乃雀数
千羽死落せり人みな奇しとして迫悼の他羽に成る霊應真に世に
流布する所の仏驚の奮号に高冨とひしを自然と霊尊に賞しく
石茅師とそひ山獅に高冨とて

絶、過、庄、野、郵、有、寺、撃、高、楼、西、福、門、前、景、
東、方、世、界、秋、百、病、無、自、性、四、大、一、浮、漂、
刻、石、薬、師、佛、此、言、須、黙、頭、

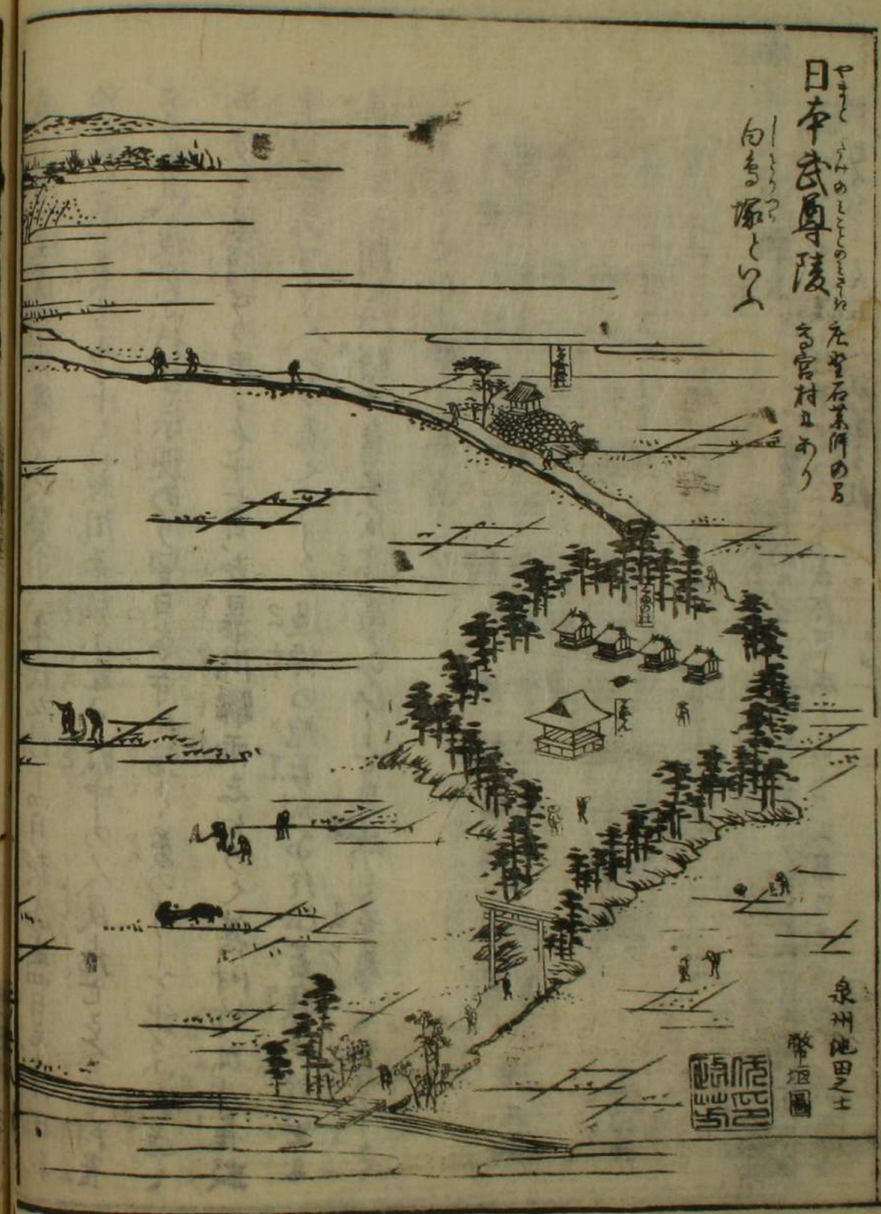
拝、石、薬、師、其、制、工、應、供、方、土、本、當、東、
露、舎、虚、碧、瑠、璃、色、間、出、身、途、鑒、鍵、中、

澤菴和尚

古仏のあひしゆ篠北そのまとふ所なるあの数へつりしと

全

御曹子範頼祠 石茅師ちの白ひ張茅の表ゲしの枝の内まあり土人ミむ
と倒たこゆへ後ふ枝茅栄て今武紙遍破といふ田畠の中たのう範頼


日本武尊陵
元堂石来河の内
さる宮村ニあり
白鳥の塚とも
泉州地図之十

石薬師寺

伊勢 **石薬師** 四日市より八里式拾七町 此駅市中七町許 東の方高山と称す原とて又地名あり

生立つゝ病をゝひとる鶯の聲にまぎれぬ夕ゝ里の郷 光慶

稚武彦祠 長澤村にあり石薬師駅中より左の方へ入る半里許 神明社 武尊御子稚武彦王なり 世人橋姫なり 迎年事保 武尊と称し奉る 駅中に道標の石仏建り

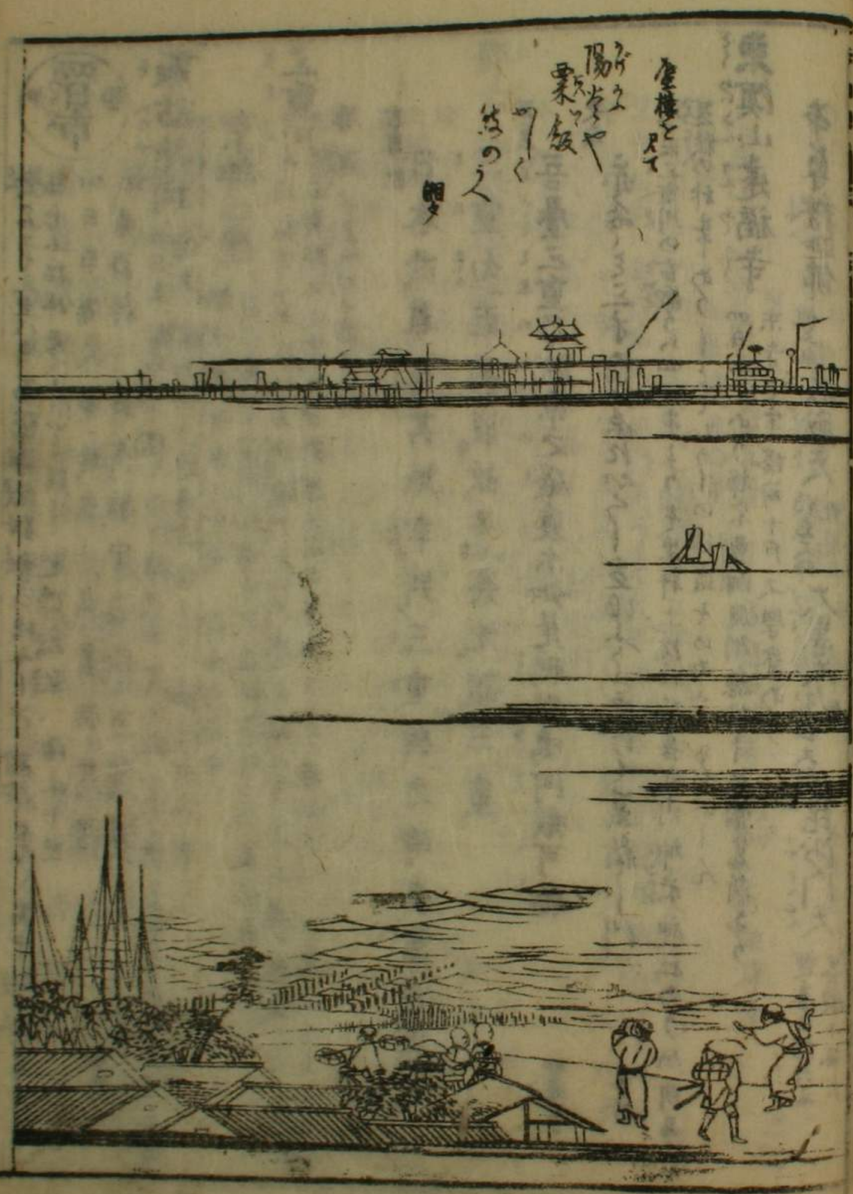
年中山仏 遊行 繕足といふ人 日本武尊 遠比婆理都久婆 袁須 疑氏 伊久久用 加匠 都流

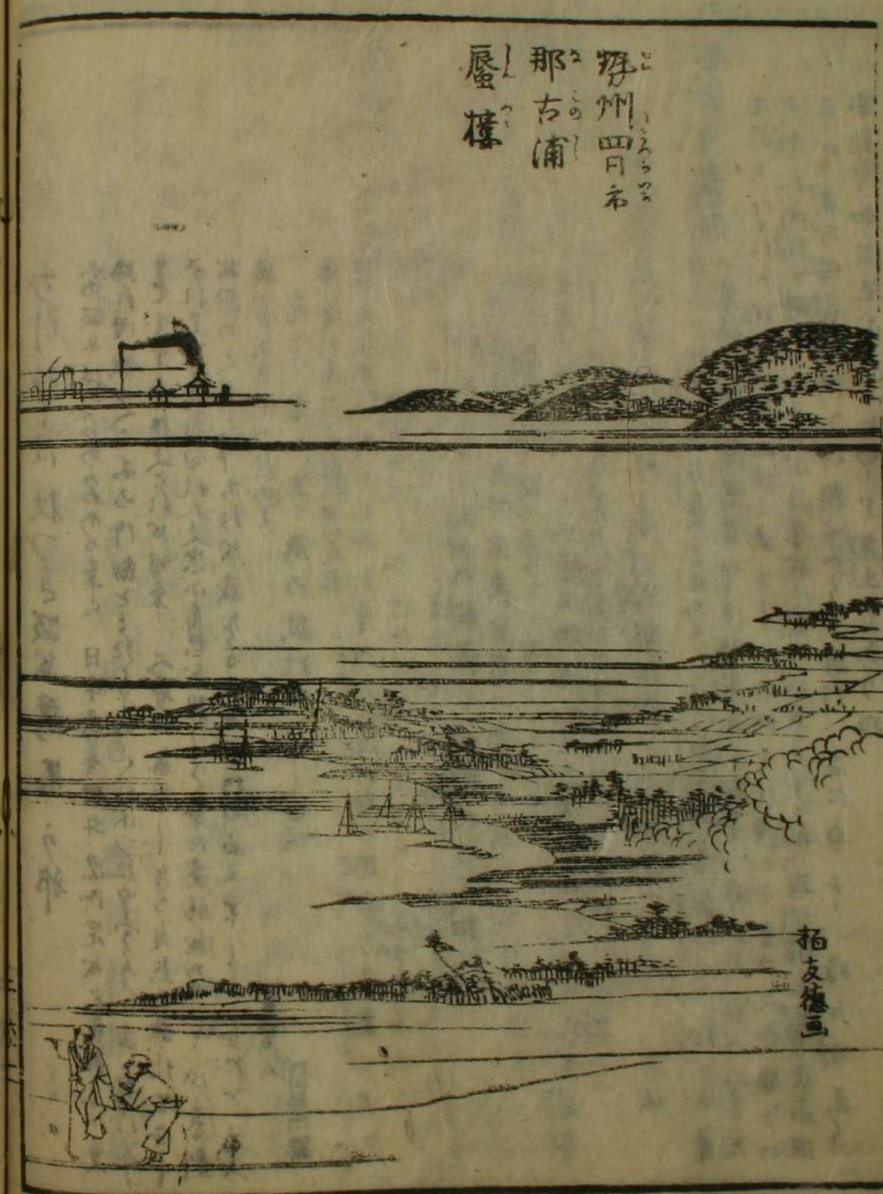
こもり山人古蹟 石薬師駅の東小谷村右の方十三町許ふこもり村といふあり 歌仙赤人の棲所と云 古蹟は里の山上に東西南北四方に双木の老松あり 又畏の方は一宇一石の祠あり 貝原篤信 吾嬬紀行ふこ迄 八十間 傍に赤人の硯水に汲且 毎年試筆の硯水汲し 運とせしし

岡分寺趾 石薬師の東の曲郡岡分村にあり 今津古宮と称す 一州一社の古蹟 元明帝書老年中に宮あり 日本武尊東征の凱陣の時所足 昔

杖衝坂 海道筋三重郡杖つき村にあり 日本武尊の血塚と云あり 詳なる杖つき坂 歩行成難 杖つきの坂 自當藝野上差少辛行固甚疲衝御杖稍歩故 号其地謂杖衝坂也

采女村 杖つき坂の東にあり 傳云 日本武尊 采女出く 采女の名あり 采女の墓 采女の碑 采女の祠 采女の社 采女の宮 采女の塚 采女の井 采女の森 采女の橋 采女の道 采女の里 采女の郡 采女の郷 采女の姫 采女の殿 采女の人 采女の名 采女の跡 采女の歌 采女の舞 采女の踊 采女の笛 采女の太鼓 采女の琴 采女の三味線 采女の琵琶 采女の胡弓 采女の笙 采女の篳篥 采女の龍笛 采女の横笛 采女の尺八 采女の鼓 采女の太鼓 采女の鉦 采女の鐘 采女の木魚 采女の数珠 采女の念仏 采女の経 采女の仏 采女の神


屋樓と
陽光や
栗の飯
つく
後の人


勢州四日市
那古浦
蜃樓
栢友德画

四日市

伊勢

名古屋三里八町南勝海陸都會の地にして越人多く宿中繁盛なり
旅舍ふ招牌多くして賑ひ尾州宮駅、海上千里
四日市場人参、赴ノ處こゝ商賈相共ニ遇
交易添得一日多ク廛中恐倦公超驚

春齊

諏訪神祠

四日市駅の東ノ端ふあり近隣群祭東遷あり近隣群祭
都味歯八重事代主命
建仁年中信州諏訪上下社かゝた勧請
建御名方命

三重川

日駅中ふあり一名諏訪川と云ふ或ハ三瀧に書次水源ハ冠岳より海に注ぐ此橋上より那古
三重郡の山中七里許流る四日市より海に注ぐ

海鮮に見へ了ぬ

古事記

日本武尊自其地幸到三重村之時亦詔云吾足如
三重勾而甚疲故号其地謂三重

万葉

吾疊三重乃河原之磯裏ふ如是鴨跡鳴河瑕可物

伊保麻呂

支太

泰勾くゝ三重の河原に立ゆくけて裏稜ふ川

幸経

或云三重川の古源ハ四日市より北里許上流に延喜式内神社あり此所より
遠後の往来ありしとそむしの海道そのあり少やあらん

東願山建福寺

四日市ふあり禅宗曹洞流洲總持寺の輪番所あり
末寺七宇塔司十戸又學寮あり

本尊繰迦佛

傳云天竺
弁財天

傳云天竺
大黒天

傳云天竺
毘沙門天

遠慶の相共ニ
客殿小安ニ

鎮守

伊勢

當山會式

二月 延喜令四月
四月 大延録鬼七月
十月 曜八會十二月

涅槃像 優ニ兆殿子等
十佛像 十二佛像 優ニ恵心等

出山釋迦 致虞等
拈華歌迦 類輝等

當寺開基ハ空堂了源和尚之總持寺二世我山和尚ハ五哲の第人なり開傳ス
空堂和尚ハ玄旨和尚の同門ふ那須の殺生石ハ海ふ投ぜり
今ハ空堂那須ふ出ずべき成其
ふ川ふ石立の具と玄旨とふ
分に空堂とも云ふ

那古海鹿樓

四日市の海辺那古浦ハ名呉浦ハ名呉浦ハ名呉
攝州に入今大坂日本橋のあり宮神多むしの海
浦あるべし日本橋の南九町目ふ名呉浦
又那中ふも那古浦あり尾州那古浦ふ考ふ浦
鹿樓海上ふ川流云伊勢太神宮尾の熊田宮ハ神
其形風漁川ふ有經蓋
宮殿の相鮮に見へ尾州海浦ふ
ふる又尾州海浦ふ
の海ふ潮水の氣勢

那者天地之質也動者天地之氣也質者姑不論雲夫一氣之運動轉旋也食氣者皆異霊神仙人霊禽獣鱗蟲者有道遥者有苦勞者有願見者有隱匿者彼此萬態皆一氣哉吾郷四日市驛之爲地也在勢州湾北畔而遠望東南数十里

面ニ干大洋海門ニ矣是海門也南界勢之熊岳北則尾州海嶠也其間亦數十里有鑑洲及小洲數慶點ミ如盆池設石然吾郷所望不能拖取其微而已春夏之交數月中一日晴霄和氣雲靜風收將雨之前自熊岳至尾之嶠忽鬱烟蓊蔚霧靄失海門所在而地如連接霧上有物如雲烟變態或臺閣或門闕前有干旋後有董路行烟變態或臺閣或門闕前有干旋後有董路行伍排列森森奇觀不可說也須臾湮滅而山海景象復平常南而移轉而失北古今不違歳率五五七回若二三回或不見焉不過吾郷畔數千歩盖所以爲吾郷名勝也士人傳道二所皇太神廟遊幸干尾之熟田神廟也惟物者云勢湾之北畔産蜃也尚矣盖以其所吐也鳴呼神霊之遊幸也蜃之吐氣也爲天理不可窮神慮不可測若夫天地間之一氣運動轉旋爲奇觀爲名勝者非邪秋里生特著東海道中ノ名所圖會求貞カ所記ノ圖曷是奇勝ノ旦題事實以贈亦貞之拙筆端之一氣哉

寛政七年乙卯夏五月月市驛廳馬曹西村貞節甫

垂坂観音

四日市駅を里許垂坂と云ふあり天台宗市尊寺の観世音ハ慈覺大師作安阿定朝基ハ慈覺の師匠也迎むり諸堂巍々たり山徒僧侶の結縁に荒蕪次

徒然草に和尚本願の舟本去都の崩躬迎むり

志氏神社

鎮明郡柳津村にあり延喜式内

案神天照太神荒魂なり祀

万葉

あをによし奈良の都は咲く花の匂ふがごとく今盛りなり

西仏滝蹟

山家

今回蹟さとりあるべし

名物燭給

陳容公饗宴茶名の燭給とく給と

町屋川

尾州小牧合戦和睦の後内大臣織田信雄と豊臣秀吉と仲あ

茶名

伊勢

宮ヶ瀬上七里代入海郡尾州の国陳氏佐屋宮ヶ瀬五里茶名郡

小茶名あり茶名高名之山州宇治郡に宇治あり愛宕郡に愛宕郡

愛宕あり愛宕郡に愛宕郡

年中已後の年中野尾郡會の郡

茶名盛ひう三伊盛と茶名盛と文正年中

至盛しく茶名盛と其後文聖周防守景後

一柳右近將監直盛氏茶門磨正貞和等次第に頻

後平戸侯松平侯次第

至盛あり

名産白魚

漢村赤須賀中ノ漢

時雨給

初冬の所天味あり

名産白魚

漢村赤須賀中ノ漢

時雨給

初冬の所天味あり

名産白魚

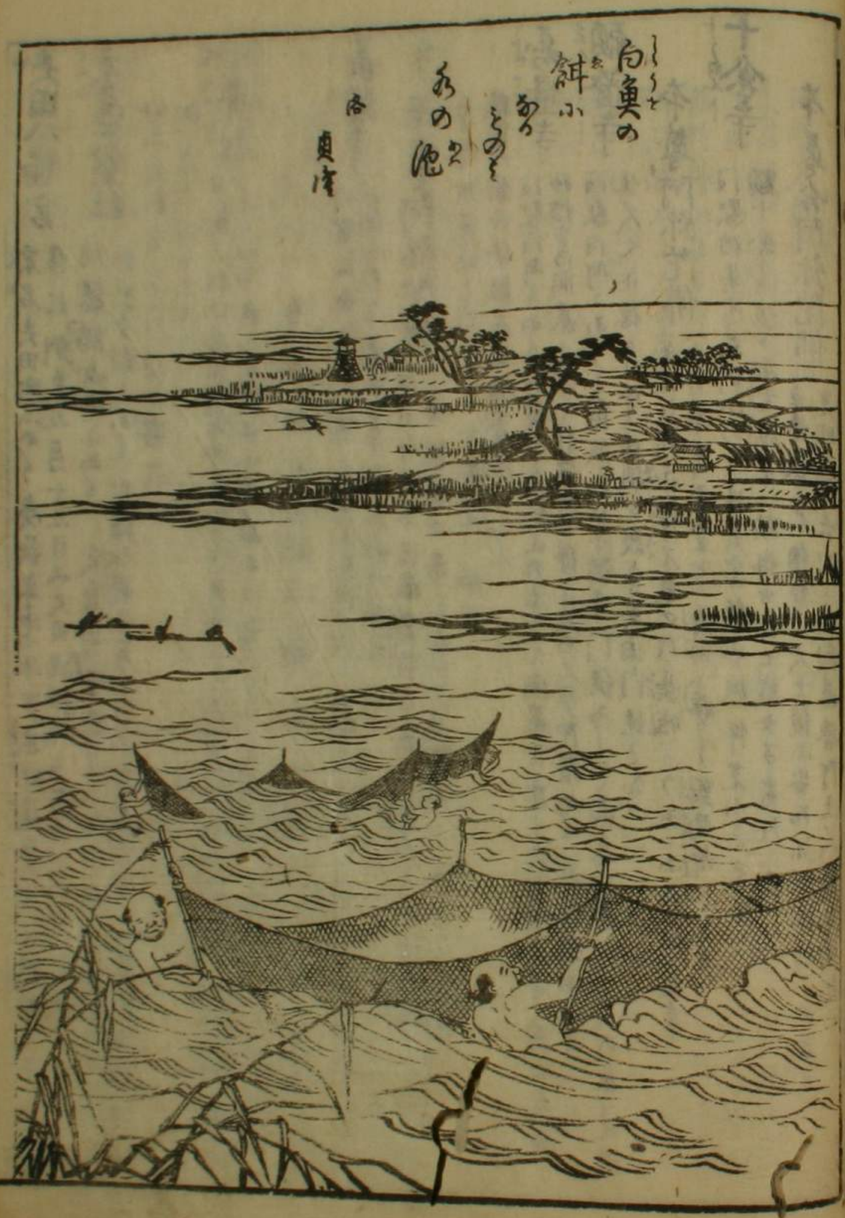
漢村赤須賀中ノ漢

時雨給

初冬の所天味あり

四日市名産
ちいさ富田おはけ
の鬢掛の名物
うそゆきしの人も
ちふ憩ふ酒と
勧ちこれが
黄瓶を

……ちゃ
ちん餅の
ふゆる
春
雅作


白魚の
餌ふ
あり
あの
池
東彦

栢友德画

矢田八幡宮　京名矢田町ふあり慶長年中本多忠勝侯西の丘より村うつるに移し例祭九月十九日又六日祠社也みあり

天武天皇社　同驛鴻巣町ふあり　天皇の御年八日本紀ふ見へ四世孫本郡なる村ふあり古蹟ふ菊の井と云名泉あり天皇の御供水と例祭六月十六日

一本松　本郡なる村の西田圃の中ふあり東西三十間許南北九間許西代の大樹ふ

一本松　しく四方表へ木法ふ山神祠あり津古宗本郡なるの旧跡と

一本松　本郡なる村の西田圃の中ふあり東西三十間許南北九間許西代の大樹ふ

長圓寺　同驛同町ふあり津古真宗西派初ハ真言宗同地ハ城下の西江湯村の小郷ふあり慶長六年今の地に移し

本尊阿弥陀佛　他不詳中古住職貫通本願寺蓮如上人ふ帰依し今宗と成明應五年之頃力日實如上人より方便法名

長圓寺　同驛同町ふあり津古真宗西派初ハ真言宗同地ハ城下の西江湯村の小郷ふあり慶長六年今の地に移し

本尊阿弥陀佛　他不詳中古住職貫通本願寺蓮如上人ふ帰依し今宗と成明應五年之頃力日實如上人より方便法名

織田の家臣佐藤左馬頭義信と云

壽量寺　同驛同町ふあり日蓮宗身延山の末寺開基日意上人文明年中建立京師妙信寺の開基と同し什宗ふ日蓮上人の之曼陀羅あり其外教品あり

願證寺　同驛同町ふあり之西田派初ハ本願寺門徒と云田門徒と云

上人之正德年中西派ふ改し之西田ふ移し迫年

本尊阿弥陀佛　安阿弥他永禄元亀の比長吟と云ふ移し迫年

十念寺　同驛佐馬町西側ふあり津古宗鎮西派　宣喬年中本堂を一身田ふ移し一野面所と云

願十念寺　佐々木丹後守藤原　額併光山七歳女子書ふ

本尊合阿弥陀佛　立像長三尺観世二大士俱ふ安阿弥脇侍ふ地蔵菩

光明天併古ふ上人開基譽阿上人他ふ安阿

法然上人御影　当寺ふ一重宗　良忠上人御法之師　其外畧之

支當ふ初ハ当國朝倉郡田老村ふあり浄正り基の業創り蓮緣ふ

良忠上人　二重郡四足八身村親鸞寺ふ立て専修教と弘め八男子譽阿

弥陀佛ふ成る住しく念佛六方遍ふ月々鳥ふ浄土宗ふ

師の良忠上人東関へ到さゆふ譽阿ふ余他とおしみ九品の聚舎を

約し且ハ今より毎年寅の刻に東に向ひ手ふ合掌し十念

迄と称く約し之れより毎日寅の刻に東方ふ向ひ合掌し十念

称名し白光ふ入り故ふ併光山十念寺と

譽名滅地に移り又天正年中

今の地に移轉ず

光德寺　同驛新町ふあり津古宗鎮西派　額光譽

本尊阿弥陀佛　恵心僧都他長四尺余上品上生ふ刻む法然上人遠州櫻ヶ海

ふ勧さ師の源皇阿闍梨ふ則ち上人ふ授ふ中興

念佛　地に隠標　尚寺ふ中興ず

泡洲崎八幡宮　中ふ加良洲南ふ泡ノ洲と称ふ北ふ自凝洲

春日ふ祭ふ京内例京八月十九日

菜名神社　同驛宮通の小ふあり延喜式之菜名神社二座例京七月七日

菜名滅地に移り又天正年中

今の地に移轉ず

祭神　二崎明神　春日明神　攝社　大山祇神　母山祠　京祭　大己貴命　地主祭

末社

神明　熊野　若宮八幡　多度　酒解神

荒神　白山　獅子　任吉

當社ハ彼母山地主神なり日吉山王大宮神社と延喜式内　京名神社なり是
みくらん社又三崎明神なり日吉山王大宮神社と延喜式内　京名神社なり是
是日明神を京名益田左衛都村ふ移し同帝永仁三年八月十八日益田氏
なり　加良洲の門山母山の社地に移し

幡龍尼

京名城西の角なり二つ目の櫓なり　棟瓦あり　古代の瓦
読云　此下ふ奥御殿なり

本統寺

京名寺町ふあり　京師　京平預寺　梅嶋所　京名御所　初も
教如上人の息女　長姫君法体なり　寄量院殿と云ふ門徒衆
代百余寺　尾濃皆に散支ス　寺中二ヶ寺末派

倫崇寺

所ふあり　高田派　初ハ仏心宗　唯仏房と改ひ　開基ハ真海と云ふ　二世
圓林房　親鸞聖人ハ仏

本尊阿弥陀佛　親鸞聖人影　自作　六十三才像　光明本　一幅　聖人ハ
真筆

文殊像　天竺ハ歩　優寛伝都の寺主王地の持ものなり　奥文像　初ハ自疑作
當寺ハ船着所　奈良を墓の弟子　親鸞聖人　六十三歳の時　東関　洛の時
當時ハ船着所なり　祈ハ親鸞聖人の寄像又ハ光明本
深草　しく遷し　旧地ハ今の
走井山の辺隣西の山ふ　かとうと

神寶山法皇院大福田寺

京名城下十町許あり　京方ハ北ふ
真言宗仁和寺門室の門法流なり
本尊阿弥陀佛　安倍氏の作　作者　聖徳の霊作と躰の真一貫と
毎月十五日　御殿近隣　祈願法

正観音　右脇檀　小安法長八尺　寛平法皇持念の本尊　当山の附属寺院と
寛平法皇宸影　左脇檀　小安法長　堂内小堂仏多し
聖天堂　本堂の南ふあり　雖酬　二室院宮報恩院法下持念の当寺　霊験　所に
十一面観音　り基伝ハ　鎮守　天照太神　八幡宮　門前の山麓ふ鎮坐

什寶

○八相成道画圖　聖徳太子御筆尚古貴一の什宝之ハ相科ハ　海内の寶と
○十六善神繪　聖武帝御寄附　皇太神宮法樂服　若會本尊あり
○如意輪観音曼荼羅　淳和帝御寄附　八佛曼陀羅　同帝御寄附
○金剛界大日像　淳和帝御寄附　○文殊菩薩繪　村上帝御寄附
○金剛子念珠　寛平法皇御ふ持　○寺領編上目　法宇多帝ふ給
○不動尊　弘法大師作　同尊　智證大師作　○不動尊絵　真敬大師筆
○紺紙金泥　龍施女絵　光明皇后御筆　○弁財天　弘法大師作
○二菩薩法号　法陽成院宸筆　○当寺縁起　西三条内大臣實隆公筆
其外数品略之

当山本尊

開明天皇御宇　聖徳王の筆創と其後　天武帝　持統帝等
り幸あり　般若會仁王會あり　聖武帝ハ皇后神宮奉幣の時当山ふ
幸あり　千僧法樂會ハ桓り　弘法大師ハ一宇安居　二密の法ハ
淳和帝の御時ふ勅願真言の梵刹なり

實平法皇（天皇）皇太神宮（法樂）と俗ぜんて當寺ふ幸あれく皇太神宮の
新向ふ作侍ぬ人月と果ゝ日ふ猶こまに游觀しゆ（因茲方丈）と川宮とゝく
法皇院と號を　後冷泉帝も永承七年正月幸有て一丈價ふ發て勅會の
續經あり其後弘安元年天皇ふ羅く伽藍炎燼とる中興伊勢長官額田部
大和守實澄神詑ふ蒙り忍性上人（興正菩薩の上足なり　ふ付て奥言律院とある）と心を合せ再建ふ及び
福田寺と號し忍性を中興とす　神詑の靈應感應ふ達し　後宇多帝の
勅願寺勝の詔ふ賜ふ足利將軍尊氏當ふ尊信しく大の字をくわへく
大福田寺と稱を世人ふ呼ぶ寺と成ぬ　厥后明應ゝ之正に至りて敕ナ方の兵燹に
罹りあ往古の南伊勢山田ふ移りく神宮寺ゝ唯一ふあり　ふ付奈名郡に移ふ
近世万治二年また安永村江場村の間ふあり今東海道ふ入福村ゝ（あり是當寺
の門あり）ふ故ふ入門村ゝ（ふ）北伊勢ふ於て勅願の靈場眞言の古刹に
於くふ及びあり　塔頭ふ十七院末寺四百四十餘ケあり終守人
御寶殿　宮原町ふあり　持統天皇の御代之後の神寶ふ ちく ふ始く納置し　近代
又　天武天皇帝の御之後明神示現あり

佐乃富神社　所宮嚴社地ふあり　延喜式内

中臣神社　同所ふあり　延喜式内

佛眼院　京名奥店通ふあり天台宗東叡山ふ屬に山号寶興山
額　隷書ふく寶興山と書に玄龍の筆

本尊文殊菩薩　岩山二十世快尊法師の作靈佛阿弥陀安石弥の作
又十一面觀音　二尊荒神共に快尊の作
什寶
紙銀泥華嚴經行願品　惠果阿闍梨筆　延喜寺緣起　尊者　聖王筆
宣撰傳　唐筆　釋迦如來移座ふ　纏ゆ比叡の砂画ふ
已上

當寺の開基は僧教之師ふく陳海院と号し　同世今の東方村の西南あり
延喜帝の御時ふ三倍四社の神宮寺と成ふ　後今の地に移ふ當寺二十
勅願法下ふ成ふ　百七十餘の僧ふ保ちて寶天とゝあり　寛和年中
の住職ふ之擧法下ふく　天海和尚の門ふく　光慶ふ比叡山ふありく天台宗之
天圓寺　京名入江町ふあり　津宗ふ宗あ山城ひ比叡山ふありく天台宗之
仁明帝御宇呂運和尚開基其後芳州ふ明邪馬場ふ移に
本尊阿弥陀佛　恵心僧都作脇侍阿弥陀　表日作　不作定朝作長武天
立像　初ゝ天台宗の本尊之馬場村に移ふ　ふ
お鎖　不動　師とゝ人　鎖ふ之社　天照皇大日　と奉る　京日六月十六日
什寶
十王画像　觀音菩薩　丹青ふ殺之。天皇天　作殺人鮮作投頭巾を着に異相之
地蔵菩薩　本尊吉画。不動尊　十六羅漢　俱ふ神筆古画　已上
高寺ふ慶長年中　京名　地町ふあり今ふ一名町と云く　武士屋敷と
号法二ふ入江町に移ふ

柳堂法盛寺　京名蓮町ふあり浄土真宗西風寺中五ヶ寺
末寺六十所箇寺北伊勢ふあり

本尊阿弥陀佛　法蓮仏長三尺余作菊と奥延〜〜[illegible]歯吹の如きと称ス
開基ろうの安重仲ろうく奥州秀衡の持尊之

経蔵　延享寛政二年造立額般若山天竺禁天成寺　櫃尼東隅ろう南〜十一枚間　東
東福寺の尼と草庵ぶり　拝ふ東福寺八南山聖一国師ろう大雅の[illegible]

仏住瑞をあらに
仏をあしん免

金鼓堂　鼓横堂あふ書院　額柳堂
宝鏡寺宮理秀尼公
当寺八原天台宗ふ　嘉禄えほの仏親雲聖人
所承後の付あふ深沙ふ　柳堂と称ス重人の所学ス忠圓房任蔵
しく今宗と改め十字の名野分賜人今ふ右互に忠圓房八奥州伊達
秀衡の支族文和七年十月十七日寂に六世祖慶應仁の乱と避く勢州
奈名郡併田元三河に移ス柳堂阿弥陀寺と号ス第十世祖大僧都
祐珍法盛寺と改め又坂石山本願寺顕如の時敗如上人ろう軍
催促ふあり十三世得全院寂然本願寺准如上人の孫ろうくあいろう
代々准如ろう当時寺号ろく当十六世ろそ今〜〜

最勝寺　日所ふあり右同宗西風当る原真言宗之
本願寺第三世覚如上人ふ浄して今宗とあり

本尊阿弥陀佛　長日の仏初メハ同国長橋坂村ふありく西脇寺と号し
辰田ふ移ス長法寺名ふ転化享保年中　門徒五千余家あり長橋一乱の時尼州
寺号ろく　仏一世ろそ

不動院　日所ふあり真言修験道醍醐三宝院ふ属ス旧名天満寺と
元和中城主松平忠州度所祈願所と

本尊不動尊　表心の仏　金剛界大日尊　三国伝来

鎮守天満宮　不動院境内ふあり当る居額天満天神佐々木志津広綱　神体ハ長
のろ〜〜ろ親菅神彫像　辺衛信基之の筆ふあれハ天正
奉納ろう所　其一幅あり　其上小祠非御成書〜　菅廟一向所に

楊柳寺　日駅新座ふあり曹洞宗旧地ハ城西柳塔と云所之此所　持統天皇藤籠の
地と云旧跡ふ名木の柳あれハ寺号ろう

本尊釋迦　坐像　正観音　金銅坐像天竺像
玉瑞蹴勝の号解

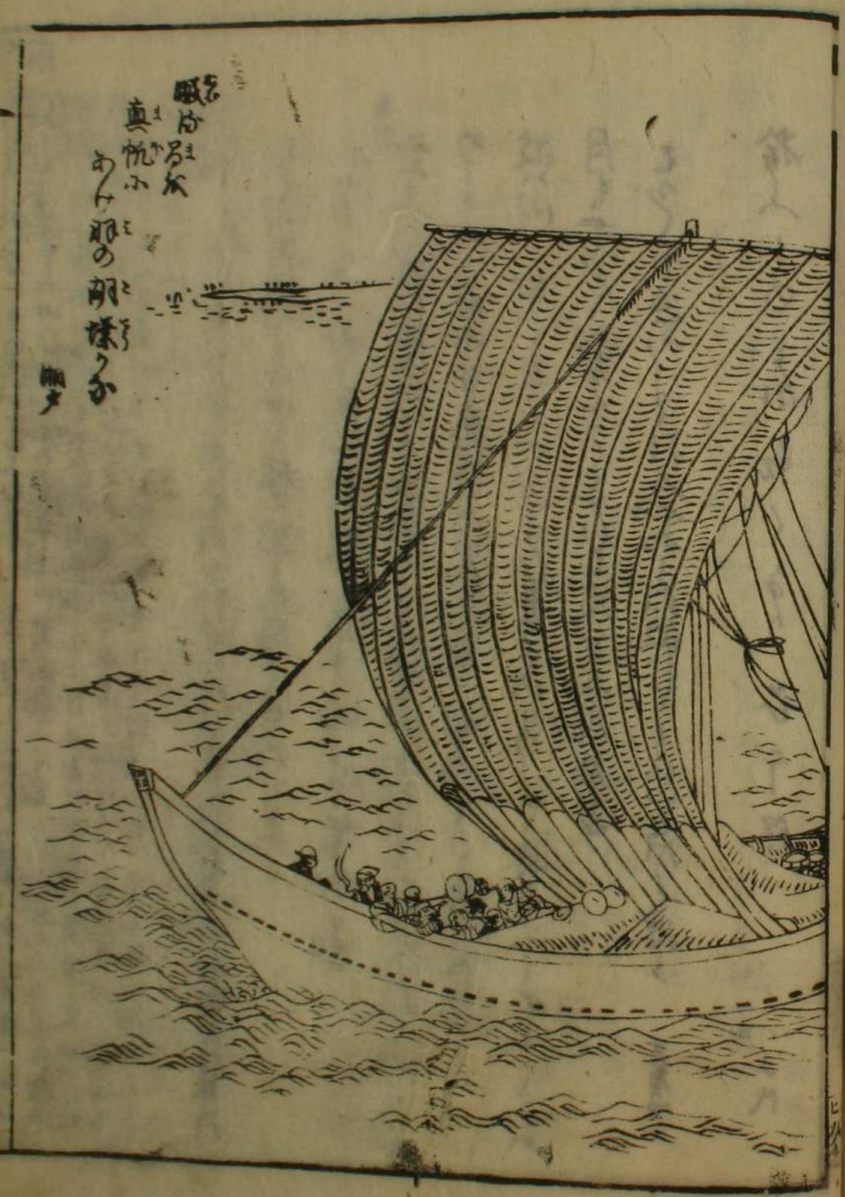
赤須賀地蔵尊　赤須賀東渡の上ふあり石像三尺八寸海ろう出現真言修験道寺る
須龍宮山　佐々木志津広綱　額海禅祖

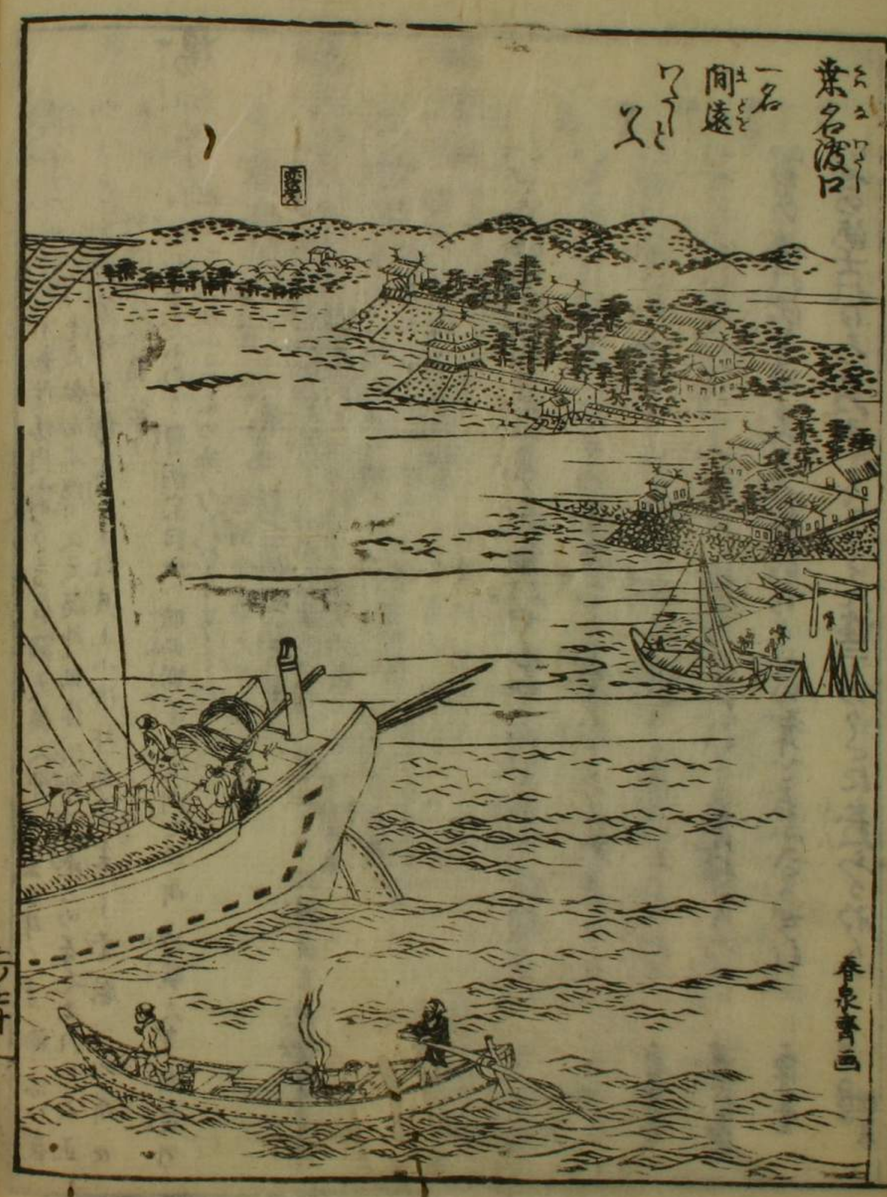
常燈明　夜走波海廻船の燈ろう　大宝地蔵王　額
資番年中ろう　西南の陰海ふ　芭蕉翁句碑

伊勢海　京名ろう

白魚塚　匂ハ[illegible]ろう

いせの海ふ沖とるすまをかけやれやなかをしを定ふ　陸奥守[illegible]
法眼　　　


真帆ふ


一名
間遠
春永画

間遠

波口 桑名七里の渡口なり 天武天皇大友皇子と戰し給ひ尾張の國に入給ひ間遠こと宜へ田舟ふなり名ふ人
遠州の國浜名湖 波口七里の間風烈敷 海路は朝夕見佛寺の渡
東山あんこと遠の浦々遠ふ名ふ人 真砂の海路は暮さ時は伊勢へ
也伊勢尾二州の國浜名湖 波口七里の間風烈敷 海路は朝夕見佛寺の渡
船にのりも可く 伊勢物語 天王社へ詣し十七
むらしたとこのうらを来て
あそこひの波のつゝふゆく波のいそをたゝく岩川と見えく
ひやくしく義を引てこのあひ〳〵ふうこゝろ思ふくも思ふあるらん
曙記 桑名ふ貴人賦のあるし度歌をそのをそれをそれてやつく
ゆうつゝ思伊勢尾法のあひの波つゝ年のくとこ歌の月の元今ふ
波に附く白く立くぜこのうひ舞もいのゝく舟をくてくらくて人
月もやうく入方をくるもれを人と思川先年
むらくやうこゝろ計人やあゝね波むしのいをはうこゝろ 光長卿
拾人ものこれ気人くなりぬ 千鳥 よ代

三七十二

檜物子 年賦 間遠のつゝ

班竹

多度神社 北伊勢 桑名郡多度山ふあり 桑名城より北三里乾ふ当る 延喜式云多度神社大名神

名度川の瀧と清こらむ〳〵宮はうゝ金鼓ふ人ふ 人伊勢物語

祭神天津彦根命 多度大神 根殿 左面足尊 右惶根尊 新宮明神 母明神 祭代 と称ス

日本紀曰素盞烏尊御子天津彦根命此茨城国造額田部連遠祖也

續日本紀云延暦元年十月朔叙多度神從五位下云云自其仁明嘉祥年間次第昇進暑之

三代實録云遣正五位下石中弁大枝朝臣音人向伊勢国多度神社尾張国熱田大縣等神奉神位記財實

奉神位記 勢國從二位多度神 同録云貞觀五年六月進伊勢国多度神加正二位 同録云仁和三年四月六日乘

三年四月六日乘 多度神社遣使奉帯 東名郡

攝社一目連祠 神社の側ふあり 忌部祖也姓氏録三天津比古禰命ふ天目一箇命比止都禰命

社荒之北伊勢洪水暴風の災あり 神出現〳〵 其難 洪水 波の勝ふ

汁なあり附ふ 初〳〵 雷電 故に北伊勢に洪水 波の勝ふ

神靈の應驗今古ふ 〳〵 雷電 故に北伊勢に洪水 波の勝ふ

多度神社といふ 天目一箇命 古語拾遺 天目一箇命ハ荒祭伊勢西國

多度神社 社荒之北伊勢洪水暴風の災あり 神出現〳〵 其難 洪水 波の勝ふ

多度神社 社荒之北伊勢洪水暴風の災あり 神出現〳〵 其難 洪水 波の勝ふ

多度神社 社荒之北伊勢洪水暴風の災あり 神出現〳〵 其難 洪水 波の勝ふ

多度神社といふ 〳〵 雷電 故に北伊勢に

東社 伊峰久志祠 八幡宮 一番祠 藤波祠 稲荷祠
八王子祠 両宮 鉾立祠 山神五坐 竈神祠

文安社の鎮座六年歴久遠ゆゑ〳〵知る事能はず往昔多度神社山猪祠
村尾津村等の邑里みな神領なり〳〵五月の祭式
ふもとの村〳〵勢ひ故ふし村民流行疫病成ハ寿婦の祈願しるし永禄年中
多ハ織田家の命を蒙り瀧川一益大将軍として長島多度のあたり合戦
止事なし山村多度神社焼失ス羅ス神宝舊記一煙ス亡其後慶長六年
の頃本多忠勝侯桑名城の時当社を再営し中〳〵其より累代の城主
尊崇あり天保舊観小祠なり年中の例祭七度中ハ五月端午ハ流
鏑馬あり神領の村民神祭小於く闌ハ〳〵てあしと述む騎人四拾人ハ
者〳〵日神輿之基小山村の東沸旅所へ神幸あり〳〵あるも流鏑馬あり
近国近郷の老若神を〳〵ひく祭系稲麻ハ異なり〳〵同月初酉日ハ田楽
神幸祭後月那日ハ沓形餅を神供ス次神主小串氏宋宝氏の二家社
伝法会ありとい〳〵真言宗ハ〳〵大悲の徳を本尊とし上愛宕ハ坂路千餘町

あり所見地蔵弥勒堂観音堂ハ倶ハ禁ハ霊験を喜宝院と社頭ハ弥殿
幣殿神饌殿神輿舎ハ水所ハ〳〵ハ〳〵の滝川を用ひ金鼓ハ三宅堅怒落あり
抑南方ハ 内外の神山多多の度しろ実ハ神国の中ハ神国たるべし
多度川 水源ハ壺渓の下流岩ヵ側ハ〳〵地中へ入り抜こ千四五町を経く
不思議あり 又勝出偏々と流る事一里ハ〳〵俗説ハ〳〵記し〳〵
神水其地の様ハ避さしめ〳〵ハ〳〵流れ地中へ入るの四五町ハ頭人の家あり
多度川の清さハ〳〵れ千年の昔ハ〳〵
或ハ云多度郡ハ〳〵ハ法国の郡名と則多度の北の山続さ〳〵上古ハ
多度も美濃国と者老ハ〳〵多度の山続さの奥あり〳〵
落葉川 多度本社の傍より流る
龍川と云
多日記 宮人の家名ハ〳〵ハ〳〵
多度梅 多度桃 倶ハ名高く梅ハ多し
神風ハ北の要ハ多度のむ光 秀川
七色楠 本社石階の下ハ〳〵七色の楠ハ〳〵
枝流三方別長治城修理の時山楠を伐く城門の扉ハ〳〵
近々〳〵山脇に是多度明神の祭ハ城門の扉一方ハ尾州多度郡へ
七一方ハ桑名城下ハ〳〵と其後新ハ植結ハ今も大樹

朝拜峯
絶頂より
七ヶ國
眼下に
遠う
本社

多度山

五石　名所山ふもとに名石あり　世に名石五箇所あり　烏帽子石　龍石　影向石　御櫃石

山五箇の内龍石は本社の後ふもとに近年明和辛巳七月十八日夜雷石自然と崩れ落く所一夫斜の樫の木あるく止ル度大の岩石樫の木

古鏡二十面　古剣一振　陶器十五品　古銭　文字不分　壺文出る　古鏡六十六

小こ二ツ　背ふ州花鳥の彫形　至極古代の体あり　則傾ハ新又ハ

宮家へ献上ふるハ今神庫小蔵む

朝拝峠　社頭の後ろ　南方志州伊州江州之東ゐの方ゑ

雷州尾州之州信州尾州富士山等見ゆる

甕尾山　本社の西れ　峠中結壁の所あり　雷ゆ　本社の北の方

西御前　雷神と　本社の北の方

岩名山　本社の東れ　岩ふふ

立石岩　上愛宕の西

長尾山　上愛宕の西

鷲倉　別当法主の地ふ

上愛宕　鷲倉峠三十町許　獨鈷水　一拳洞の東ふ　俗に

諸国眼下ふ　両宝　絶壁ふ　弘法加持水と云ふ

八壺溪　其路傾の岩に風蘭　石蘚　忍州多し　石町筋

山石が渕　八壺溪の下流　地中へ吸込て下流尾州へ流れ　水中ふ　岩石　絶壁ふ

尾州の安内へ　流れ出る　佐屋川　舟三里　佐屋迄　舟三里　佐屋川の下流を流る七里　海船ふ

佐屋　尾州宮へ　尾州宮へ　佐屋迄十一里　佐屋迄　舟三里　佐屋川の下流を流る七里　海船ふ

長尾山　尾州宮へ　尾州宮へ　佐屋迄十一里　佐屋迄　舟三里　佐屋川の下流を流る七里　海船ふ

紀行

くり返日は海をいとひて今彩漕ふ　ふ川の多ふ　佐屋川の岸　佐屋村に

ふ結　帰と人の沙汰や　佐屋泊

津岩渡　尾州門真庄　津岩渡八丈庄村ふ出　古歌考

伊勢人ハひらあやしくろう津渡ふ

文政

文政の日いろ船人は津渡の口ふ甲斐川あけそいは津の原　名所

秋詠草　津渡ふ　棹さ　名江ふる甲斐川さく弟世乃原　西行法師

夏歌　七日市板を立く津渡の渡と云所ふ舟ふ　平勢皇子

はかるぬ駒も立をれば菅の浦ふ葉まきてうく

ちりまた棹の水紙ふ　ふれども雨降ハさらぐ　西行法師

さーるぬ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

渡りそとハおろの園ふうはり　名所

結帰あろう小笹の原ふ駒ゐ　庁園ふ　郭湯の紀ちさーく　焼世の墓ふ

[illegible]　下ふ　長明　[illegible]　下器

[illegible]　光明の紀　[illegible]　引書毎ふ　[illegible]

夕立や
塵も流して
神奈
乙曲

津嶋
牛頭天王

六月十五日
車仙
十四日有宮
桃灯
二人七十六

津嶋牛頭天王（津島神社ふるい伝説の生土神）
例祭六月十二日

祭神 素戔嗚尊 本社は素盞嗚向神 若宮 祭殿 廻廊 拝殿 勅使殿 神輿
遷宮 瀧南之門 所縁 内外皇太神宮 鎮座

一王子祠 本社の左ふかう 素神 編田 八王子祠 本社の右ふかう 素神 五男三女
第四別宮と称ス

拘宮 遷座の左ふかう 居森祠 第二別宮と称ス 土人疫宮と称ス

純毒神祠 尊神の荒魂なり 穴森民勝森祠 第二摂社 十二末社 天王の摂社
熱田神 聖神 弁財天 天照皇大神

天王社の神傳と鑑ふに此地の舊名なり藤波里と云ふ 人皇七代 孝霊天皇
四十五年牛頭天皇の和魂太神韓土より飯朝浦に下り西州対馬に
立く茅と黒ゆふ厥后 欽明天皇元年神勅有て尾張国海部郡分倉海
門真名井に神宮を造ふ神官ゆふ接ふ対馬州ふ年茅久しく鎮座ふ
ゆ門く遷宮の後も宮名改さく津島天王と称ス又地名も藤波と
称しく津島浦と称る之後世永禄天正の比贈正二位右大臣織田上総介平
信長公当国より参向しく畿内及び東海東山両道の間ふ駆ると云ふ

運命ふ対く成て四海ふ輝を幸清旭の出るが如し尚社天王の神威ふ
尊信し治平安民の擁護ふ務て社頭ふ経営し給ふ武ふ殿を建
給ふ是れ天下の瑞なるべし
しく平天下の瑞なるべし

津島系記

花洛 岡田子葛漢述

ゆ〜寛政ゆと乙丑のみか月尾張の国海の里下村民のまゝこふうて
津島のまゆつ見ふおりゆ〜た堀田氏とあるゝ考ふ下村氏の神人真を時綱
の著せる系記 正徳年の下りとても示されしゆ記ハ来由議論と王ゆしく行疫
ゆたてゝうくゆ主とあれ〜今ハ海さ〜〜見る所で拳くまとのゆくいさてう
ゆ記ふよりて要さほとゆる所ふ拝ふ系ふまの御神人民の先を撰ふ所しむて
陳ふ紀源を系ゆ人の基ゆれハ十七日の宵系をりそむ〜こと 故に
試楽と云ふ信楽と唱へ〜〜しく神宣記ふあるくゆの記ふ〜〜 二月二日
ゆ八日ふ遠ハ毒所の車座ゆ〜〜く調楽〜十三日ふ至て江口ゆ於く賜の試楽〜〜
ゆ 祥ハ法ゆ十七日十九日共ふ安全の祈とゆれ云ふ里俗ゆ也〜〜

中に霊あるの云為車樂五輌 流れ来り 橋下 橋杭に懸
かゝりくひ入るあるを伝聞ひけ高川ふなく群りて多く豆鮮となりの形ふ
桃燈と掲る事おびたゝしく記ふ二百六十ヵ所く一と夕の月数事真往ふ
ふ掛るに十二ヵ所く月の数さる欄の四方ふてこれに二十ヵ所く一月の日九数と
辺と今陸をふ見るに八日数ふれ〳〵こも陸をらんとおびゆけくもろ〳〵をみく
掛ふてこゞ〳〵ゆう篠八ゆるくようつゝ四篠のるあるを考ぐるりや考〳〵番
太鼓のかゝあるを於称と唱へ市脇村の車樂い也平波と唱へ中ゝう代
市脇八今数八素〳〵に其所ゆ〳〵〳〵つゝむゝう〳〵五輌の車樂拉ゆう篠ふ
漕出く定ふゆゆる〳〵に定ふ陸水ふ四〳〵数も多れゝ〳〵ゆ年せん代
葉を又数ひあに見りのあれいをゆ〳〵〳〵あてゆのゆ〳〵今を漕人ふ住どの
若ゆゆ〳〵〳〵〳〵おほゆ 朝来八ゆ〳〵中く市脇の車樂一輌代先に
そてゆ岩の車樂五輌同じ〳〵心車五輌を写ふ〳〵まゆ〳〵〳〵く漕出考
庄ゆ車代ゆ〳〵〳〵車代出〳〵〳〵〳〵

[illegible]

やづくに[illegible]

くにとり[illegible]

[illegible]

[illegible]

杜の神籬に
穀の汁の紅生の
丸茶まこうて飛
小淵迄ー 熊田
調進に読云
これてるん藪の
中の雷の色こ
てこ

孟宗の
日本ふ今も
あるとう
穀の中ある
巻り の
春永

[illegible]の東の角にまくさをうしなひそこ舟の人あつまりてこぐ
はうふのこゑをあつり今月八市は日ふあんおこうこと[illegible]
住還のあそびをとふなるかしぬ家はやもらの見くしみや
人ふのてうんとしようる見たのふとんは[illegible]
花あらぬ色香もたらぬ市人のいろ〳〵あそぶ魚つと

阿波の浦 蔓ばのをとうひう〳〵八海きと見くてう 古紙多し

名所たてるおそれ浦の海士さたもみるめいろくおとこそ 法雅光

後古 沒てるく社のひるまもあるやを毎あるその浦は海士ととくや 後拾遺 雅賢

新勅 いつ忘ハあるその浦はくりは貝むかしくのとまぬる社ふ

後古 ちくのふくはのもるゝ名ゆそるあるその浦はあのゆのゆ火 後白河院

新千 浦はあるその浦ふるゝ人をたつゝる月を今ハあまをそそ[illegible]称 右社

新後撰 徒はをてうはうそをひきるあるその浦はあ法のをうゝ火 寂蓮法師

阿波の杜 阿波の神祠の神歌を

一 新千 うたゝ彼くゝ人もまををれふゝたゝ果ハあらての杜と成ゝれ 紫式部

後撰 俤をつる身ふうりをそれをのしのをあそその杜ふ者を帰らん 右光

阿波の神祠 阿波の杜ふあり又栗殿社と書次守信成正法禅るとゝ

社伝説ふ云 祭神伊弉諾伊弉冊の二尊とゝ土人とむゝ[illegible]ゝ産ゝの人々

栗殿と称ゝ五穀及び[illegible]根の祝初ゝ成神供とゝ海者の[illegible]

[illegible]も造竈の初燈火献ゝ神祠の鯛を[illegible]

べく其初生を献を神[illegible]ゝ神供ゝ又[illegible]田の[illegible]

国中の人口ふ贈[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

予壯年夢日躋鄙而不聽朝政及故予
母事戎輪陋討賊徒異域予遠不勝感激
而入表懷小臣也雖然日予當嶋夷掌握時窺之
如目隣容也予遠邦小島在海中馳施帝都政直入大明之
錄盟也予入大明之富盛車洛陽壯麗莫如今日矣也夫人生于世
領也予無它保只畜顯佳名於三國而已方物
納珍重保只畜顯佳名於三國而已方物

修許憂者乎在方寸中貴國先州遠百年超焉日本朝姓閥憐憫無何不疑照監慈
年吾者朝國歷長生古山海滿之帝而入朝進軍營者遠慮億萬國易
己不雖國家之隔百餘之而後有化干大明居此
故朝廷盛富財足土貢萬倍大治撫育滅戰則其不之
攻民則無取既大敵心者四海日蒙威名及拓胎
攻則有此奇異作下自然光所無
民則有此奇異作下自然光所無
富財足土貢萬倍大治撫育滅戰則其不之
盛車洛陽壯麗莫如今日矣也夫人生于世
廷歷長生古山海滿之百年超焉日本朝姓閥憐憫無何不疑照監慈
國家之隔百餘之帝而入朝進軍營者遠慮億萬國易
雖國家之隔百餘之帝而入朝進軍營者遠慮億萬國易
歷長生古山海滿之百年超焉日本朝姓閥憐憫無何不疑照監慈
家之隔百餘之帝而入朝進軍營者遠慮億萬國易
之隔百餘之帝而入朝進軍營者遠慮億萬國易
隔百餘之帝而入朝進軍營者遠慮億萬國易
百餘之帝而入朝進軍營者遠慮億萬國易
餘之帝而入朝進軍營者遠慮億萬國易
之帝而入朝進軍營者遠慮億萬國易
帝而入朝進軍營者遠慮億萬國易
而入朝進軍營者遠慮億萬國易
入朝進軍營者遠慮億萬國易
朝進軍營者遠慮億萬國易
進軍營者遠慮億萬國易
軍營者遠慮億萬國易
營者遠慮億萬國易
者遠慮億萬國易
遠慮億萬國易
慮億萬國易
億萬國易
萬國易
國易
易